
アドリアーナ＝ルクヴール

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アドリアーナ＝ルクヴール

【Nコード】

N3091F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

稀代の女優アドリアーナ。彼女は青年貴族マウリツィオと恋仲にあった。だがマウリツィオを愛するのは彼女だけではなく。実在の女優のお話です。チレアの同名のオペラをもとにしています。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

第一幕 コメディイ フランセーズ脇の控え場所

フランスはよく芸術の盛んな国だと言われている。文学も音楽も美術もそうである。そして演劇もまた盛んである。

フランスが文化に魅せられてから演劇は親しまれてきた。太陽王ルイ十四世もモリエールの喜劇に主演することを好んだし誰もがオペラや舞台劇に熱中した。豪華で派手なグランドオペラもフランスで生まれた。

そのフランスで有名な一座としてコメディイ フランセーズがある。前述のモリエールにその基礎が作られ彼の後継者であるラ グランジュの手により正式にこの名となった。時に一六八〇年のことである。

その演目は多岐に渡った。一座の名が示すとおり喜劇を演ずるがそれだけではない。コルネイユやラシーヌの悲劇も上演する。もともと一番よく上演されるのは創設者であるモリエールの劇であるが、そのフランセーズ座が創設されて何十年か経った頃であった。既に太陽王もこの世を去り彼の曾孫でありフランス一の美男と謳われたルイ十五世の時代となっていた。文化は円熟期にありそれを味わう貴族達の目は肥えたものとなっていた。彼等は日々舞台を楽しみそれを批評していた。その為舞台関係者達は一舞台一舞台に必死に取り組んでいた。

この日もそうであった。フランセーズ座脇の控え場所は上演の準備でてんでこまいであった。

控え場所といってもその内装は豪華である。ルネサンス調の部屋であり洒落た暖炉まである。そしてその上にはモリエールの胸像が置かれている。

そして四つの扉がある。そして棚に鏡と小道具で散りばめられて

いる。衝立や金色のテーブル、花模様のダマスコ織りの肘掛け椅子や腰掛が並んでいる。ゲームテーブルやチェスもある。

扉の一つから黒い髪と瞳の背の高い女優が入って来る。東洋的な美しい顔立ちをしており均整のとれた身体をしている。そしてトルコ風の衣装を身に着けている。

彼女は鏡の前の席に座った。そして最後の仕上げに取り掛かっている。

もう一人入って来た。あだっばい服を着た紅い髪と茶色の瞳をした小柄な女性である。小柄であるが胸は大きい。彼女は大鏡の前でしきりに仕草を気にしている。

そして二人の男優が入って来た。一人はトルコの高官の服、もう一人は庶民の格好である。二人共背が高く顔立ちも整っている。高官の服を着た男は棚からターバンを取り出してそれを頭に巻いた。庶民の服の男は将棋台が置かれている席で鏡を見ている。

そこへ年老いた男が入って来た。

見ればやや小柄で背の曲がった老人である。服は立派だが何処か服に着られているという感じである。頭は少し禿げ上がり顔には深い皺が刻まれている。どうやら今回の舞台の裏方の一人のようだ。

「監督！」

トルコ風の衣装を身に着けた女優が彼を呼んだ。彼はどうやら今回の舞台で監督を務めているようだ。

監督といえば地位が高そうだが当時はそうではなかった。俳優、とりわけプリマドンナと呼ばれるトップ女優の地位が最も高く舞台監督は雑用に過ぎなかった。だが雑用なくして舞台が成り立たないのも事実である。雑用を馬鹿にする者は何事においても大成しないものである。舞台においてもすっかりした縁の下の力持ちなくてはいい舞台は無い。

「白粉は何処！？」

「あの上ですよ、マドモアゼル！」

彼はそう叫ぶと棚を指差した。

「監督！」

今度は庶民の服を着た男優が彼を呼んだ。

「紅は何処ですか！？」

「そこに引き出しですよ、ムッシュ！」

彼はその男優が座っている台を指差した。

「監督、私の扇は何処へいったの！？」

赤髪の小柄な女優が尋ねた。

「僕のマントは！？」

高官の格好をした男が叫んだ。

「はい、扇もマントもこちらにありますよ！」

箆笥を開けて扇とマントを取り出す。そして二人に走りより手渡す。

「監督手伝って！」

白粉と紅で化粧をしている二人が彼を呼んだ。

「ちよつと、私の手は二本しかないんですよ！」

監督は思わず悲鳴をあげた。

「そんなのいいから錠剤持つて来て！」

四人共聞いてはいない。それどころではない。赤髪の女優がまた叫ぶ。

「付けほくら！」

トルコ服の女優の催促。

「バンドは！？」

「剣を持つて来て！」

男優二人が監督を呼ぶ。

「早く、早く！」

四人は催促する。もつたまらない。

「はい、全部ここに！」

四人に満足してもらう為に箱をぶちまけ引き出しを抜いて装飾品をよりだし化粧品を手渡す。そして呟いた。

「監督、監督、って私は神様じゃない。そんな何でもすぐに出来る

筈もないじゃないか。何でも私に押し付けて面倒は全て私持ち……
……もう我慢出来ない」

はああ、と溜息をつく。

「監督どうしたの？」

庶民服の男優が首を傾げた。

「舞台監督とは名前はいいがとんだ仕事だ。毎日毎日朝から晩までお喋りのお相手に喧嘩の仲裁、演出に設定、そして打ち合わせ……
……。私は一人だよ、なのに何故何人分もの仕事をいつもしなくちやならんのだ!？」

「またいつものぼやきね。さてと、最後の仕上げね」

トルコ服の女優は彼から視線を外し化粧に取り掛かる。

「役員か劇場主にでもならないと休みなんか取れそうもない。一体何時までこんなことをしなくちやならないんだろっ」

そんな彼をよそに俳優達は自分のことに余念が無い。

第一幕その二

「怖れよ、卑怯者！」

「おっと！」

高官の刀を庶民がよける。

「ほくろもう一つ必要かしら」

「いつそのこと顔全体に付けたら？」

「それじゃあかえって変よ」

トルコ服の女優に赤髪の女優が言った。

「別にそれでいいんじゃないか？」

庶民服の男が話に入ってきた。

「そうそう、あそこにいるモリエール先生もそう仰っているよ」

高官が悪戯っぽく言った。

その時左手の扉が開いた。そして二人の男が入ってくる。

一人は豪華な服で着飾った五十前後の伊達男、そしてもう一人は若い男前の僧侶である。二人は並んで部屋に入ってきた。

「あ、ヴィヨン公爵にシャズイユ僧院長ではないですか」

監督が二人に挨拶した。俳優達もそれに続く。

「あの方が？」

高官が庶民に囁いた。

「ああ。デュクロのパトロンで化学がご趣味の当代きつての趣味人のヴィヨン公爵」

「それじゃああのハンサムな僧院長は？」

高官は再び庶民に尋ねた。

「公爵の奥方のお遊びのお相手だろうね」

彼はそう言うと思戯っぽく笑った。

僧院長は彼等の話を聞いてはいなかった。何かしきりに匂いを嗅いでいる。

「何の匂いですか？」

彼は監督に尋ねた。

「ステージの匂いですよ」

彼は答えた。

公爵は僧院長の横で女優達を見ながら言った。

「また優雅な御休息ですな」

少し皮肉混じりである。だがそこに悪意は無くほんのからかいであることは一目瞭然である。

「公爵ようこそ」

高官と庶民が彼の前に進み出て一礼した。やたら大袈裟に一礼する。

「おお、これは親愛なる友人達よ」

公爵もそれは心得ている。茶目っ気たっぷりに挨拶をする。どうも彼は二人の顔見知りのようだ。

「僧院長様もようこそ」

高官がトルコ式の挨拶をする。これに対し僧院長も親しげに返す。

「どうも、トルコのスルタン」

公爵はその横でトルコ風の衣装を着た女優に話しかけている。

「マドモアゼル、今宵はどうお呼びしたらよろしいですか？」

「ザティムとお呼び下さいませ、公爵様」

彼女はしなを作って答えた。ザティムとは彼女が今日演じる役の名前である。

「ほう、まるで本物のトルコの後宮のお姫様ですな」

公爵は微笑んで言った。

「貴女は？」

僧院長は赤髪の女優に問うた。

「リゼットですわ」

艶やかに答えた。これも役の名前である。

「ほう、まるで春の女神のようだ」

あえて大袈裟に言った。その言葉を楽しむように。

「公爵様、このほくらどうですか？」

姫君は自分の肩に付けているほくろを指差して公爵に語りかけた。

「キューピットの的に見えるね」

彼はその肩に口付けしそうな距離まで近付いて答えた。

「公爵、少し遊びが過ぎますぞ。まだ夜には早いかと」

僧院長が公爵を窘める言葉を口にした。だがそれはからかいであり窘めではなかった。

その証拠に横目で春の女神を見ている。

「僧院長様には私の扇を」

女神はそんな彼に自分が持っている扇を差し出した。

「おお、これはこれは」

彼はそれを満足気に受け取った。

「実に素晴らしい贈り物だ。有り難く受け取らせてもらいましょう」

「私は後で姫君のほくろをいただくでしょう」

公爵は微笑んで言った。好色な笑みではなく遊びを楽しむ笑みであつた。

「まあそれは夜に、どうぞ公爵」

「それは存じておりますよ、僧院長」

公爵は彼に切り返した。

「ところで監督」

その言葉を受けた後僧院長は彼に問うた。

「マドモアゼルデュクロは？」

デュクロはこの一座でも有名な女優である。実は公爵は彼女のパトロンでもある。

「今衣装を着ているところですよ」

監督は素直に答えた。

「監督、そこで脱いでいる、と言えはいいのに」

姫君が彼をからかうように言った。

「そう、そのほうがお美しいのに」

女神がそれに合わせて言った。

「そう言ったら劇が始まらないでしょうが」

監督は二人に口を尖らせて言った。

「あらあら、監督ったらそんなに怒って」

「怒るのは健康に悪いわよ」

「一体誰のせいでそうなってると思ってるんですか」

彼はさらに口を尖らせて反論した。

第一幕その三

「まあまあ落ち着いて」

公爵は彼を宥めた。

「ところで劇は何時始まるのですかな？」

彼は幕が開く時間を尋ねた。

「最初の劇はもうすぐです。それから二番目です」

彼は答えた。

「会場はもう満員ですな」

僧院長が客席を先程女神から貰った扇で指し示しながら言った。

「そうでしょうとも、今日はデュクロとアドリアーナが同じ悲劇に共演いたしますから」

彼は満面に笑みを浮かべて言った。

「おお、それは豪華ですな」

公爵と僧院長は顔を綻ばせて言った。

「デュクロを女王とすれば」

公爵がまずデュクロを例えた。

「アドリアーナは女神といったところですね」

僧院長がそれに合わせてアドリアーナを例えた。

「ミーズといったところかしら」

「天界から落ちちゃった」

姫君と女神が悪戯っぽく言った。

その時左の奥の扉が開いた。

「おや、噂をすれば」

「そのミーズ女神のご登場だ」

高官と庶民がそちらに顔を向けて言った。

扉が開いた。そこから一人の美しい女性が入って来た。

長身のスラリとした容姿をしている。黒く長い髪は縮れてはいるが艶やかに輝いている。肌は白く透き通るようである。爪と唇は紅

くまるでルビーのようである。

瞳は黒くそれは翡翠のように輝きそれでいて夜の深い紫のように人を惹き付けてやまない哀しみを含んでいた。

整った顔は気品と艶めかしさを同時に漂わせている。それはギリシアの芸術の女神そのままの美しさであった。

右手に黒い鳥の扇を斜めに持つている。右手には劇の台本の台詞が書かれた巻物がある。衣装は劇の役の東洋風の衣装を身に着けている。首にはダイヤモンドのネックレスが白く輝いている。それはまるで無数の星の瞬きであった。

俳優達は思わずそれに見惚れた。ライバルなのに、である。公爵と僧院長は恭しく一礼した。監督は彼女に眼を奪われている。そこまでの美しさであった。彼女こそアドリアーナ「ルグヴール。このコメディ」フランセーズ座きつての美貌と演技を知られた女優である。

フランスシャンパーニュに生まれた。彼の家は帽子屋をしていたが父が一旗あげんとパリのサン「ジェルマン通りに移り住んだことが彼女の運命を決定付けた。

新しく移り住んだ家のすぐ近くにフランセーズ座があったのである。彼女はフランセーズ座の舞台を覗き見るようになった。

元々芝居が好きだった。子供達を集めて子供の劇団を作った。近所のお菓子屋の親父が店を稽古場に提供してくれ練習を積んだ。その芝居は子供のものとは思えぬ程の出来栄であった。

評判は高まりとある貴族の奥方の耳にも入った。彼女は自分の屋敷の中庭を劇場として提供した。アドリアーナはここでコルネイユやラシーヌの悲劇を上演した。

その素晴らしい演技と美貌に見惚れた奥方は彼女に対して言った。
「貴女は素晴らしい女優になるわ」

その顔は素直な賞賛であった。彼女は誰よりも早くアドリアーナの女優としての素晴らしさに魅了されたのであった。

「けれど………」

だが奥方はここで表情を暗くさせた。

「女としては不幸になるかもしれないわ」

彼女は哀しい顔で言った。アドリアーナの純真で一途な心が男にとつて実に都合良く弄び易いものであるかを知っていたからだ。そしてこの言葉は不幸なことには的中する。神とは時として何か素晴らしい力を授けるとともに哀しい運命を授けるものなのである。これは神に悪意があるのではないだろう。運命という神でさえあがらう事の出来ぬもののせいである。

それから洗濯屋で働いていたがそこでフランセーズ座の名優ルグランに出会った。彼女を見て一目で気に入った彼は彼女のパトロン兼先生となった。これがアドリアーナの女優としての本格的な活動が始まった。

ストラスブールの劇場でデヴューしやがてフランセーズ座からも声がかかる。タイトルは『エレクトル』であった。

そのデヴューは大成功であった。彼女はたちまち観客達の心を掴んだ。そしてすぐに国王付の女優となった。ルイ十五世も彼女の演技と美貌に心を奪われたのであった。

彼女は悲劇も喜劇も見事に演じきった。性格的、情念的な悲劇も人間の真実を深く抉り出す喜劇も見事に演じたのである。彼女はまさに天才であった。

その彼女が今部屋に入って来たのだ。それを見ずにおれぬ者がいるであろうか。

「サルタン・アムラットはその権力で私に降伏を強いる」

彼女は右手に持つ巻物を見ながら劇の台詞をゆつくりと練習している。

「皆出でよ！全ての出口は向こう見ずな者に対して閉ざされなければならぬ」

ここで彼女は練習を中断した。

第一幕その四

「これでは駄目ね」

そう呟くともう一度読み直した。口調や細かい演技を変えている。

「皆出でよ！全ての出口は向こう見ずな者に対して閉ざされなければならぬ。そして光輝ある平和が再び後宮に戻って来るように」

それを聞いた一同は思わず言葉を呑んだ。

「素晴らしい……」

まず公爵が賞賛の言葉を述べた。

「まるで女神みたいだ」

僧院長も思わず呟いた。

「あの、それはちよつと……」

その言葉に気付いたアドリアーナは顔を思わず赤らめた。

「大袈裟ではないですか？少し調子を見ただけですし」

美しく澄んだ声である。物腰も謙虚である。

「いえいえ、そんなことはありません」

公爵が言った。

「そうです、私共の言葉は真実を述べておりますよ」

僧院長も口を揃えて言った。

「いえ、違います」

アドリアーナは静かに口を開いて言った。

「私は創造の神の僕に過ぎません。神は私に言葉を授けて下さいました。私はその言葉を私の前にいる人達に伝えます」

彼女の言葉は続く。それはまるでミーズの語らいであった。

「私が語る言葉のリズムは劇の木霊です。手で奏でる儚い楽器でもありましょう。それに喜怒哀楽を織り込む私を人々は『真実』と呼んで下さいます。それは日が変われば消えてなくなる私に対するほんの一時の慰めです」

言い終えた彼女に対し公爵が尋ねた。

「貴女は何を探し求めておられるのですか？」

「私が探しているもの、それは真実です」

彼女は慎ましげに答えた。

「名のある芸術家によって貴女の素質は練られたのでしょうか」

僧院長が尋ねた。

「はい、それは……」

彼女はその質問にも答えようとした。その時側にいる監督に気付いた。

「多くの方がいらつしゃいましたが、私にとって最も素晴らしい師はこの方ですわ」

そう言つて監督を手で指し示した。

「えっ!？」

一同はこの言葉に驚いた。

「いつも私に親身になつて頂き豊かな才能を持たれた方……このミシヨネ監督において他にございません」

「マドモアゼル、そのようなご冗談を」

それを否定したのは他ならぬミシヨネであつた。

「そんなことを言つてこの老いぼれを苦しめないで下さいよ。驚いて息が詰まりそうです」

「いえ、そのような」

アドリアーナはそれを否定しようとする。だがその時舞台の奥から呼出しが表われた。

「お、もう時間か」

ミシヨネはこれ幸いとその場に居る俳優達の方を振り向いた。

「皆さん、準備は宜しいですか？」

「いえ、私はちよつと……」

「私も……」

女優二人はその言葉に驚いて最後のチェックをはじめた。その横では俳優達が何時の間にかチェスに興じている。

「おっ、はじまるぞ」

「じゃあこの勝負はお流れということだ」

二人は勝負を中断してチエスを収めた。

「ところでデュクロは？」

公爵はミシヨネに尋ねた。

「楽屋におられましたよ。何か書きものをしておられました」

「書きもの？手紙かな」

「どうやらそのようでしたが」

「だったら誰だろう」

「僕だったりして」

そこで庶民が茶々を入れてきた。

「そんなわけではないでしょ」

それを姫君が笑って否定する。

「じゃあ私だな」

高官が誇らしげに胸を張った。

「それならデュクロさんこっちに来てるわよ」

女神がそれをからかう。

「皆さん、そんなこと言っていないで早く舞台へ！」

「おっと、そうだった」

ミシヨネの言葉に驚いて彼等は笑いながら舞台へ向かった。公爵

は彼等が去ると僧院長に顔を向けた。

「僧院長、その手紙だが」

「はい」

彼はその言葉に答えた。

「どうにかして手に入れられないかな」

「どうやってですか？」

彼は素っ気無く答えた。だがそれは暗に何かを求めているのである。

「これと引き換えに、というのはどうだろう」

公爵はそう言うのと彼に皮の袋を手渡した。皮の中は言うまでもない。

「わかりました。お手紙は必ず公爵の下へ飛んで来るでしょう」

僧院長はそれを受け取ると静かに答えた。

「有り難い、これも神の思召しだな」

少し、いやかなり、それでも足りない。全く違うと思われるが公爵は満足して言った。

「では私は神の祝福に対して感謝するでしょう」

「はい。神は公爵に必ずや祝福を与えられることでしょう」

公爵と僧院長はそう言うのと部屋を出た。公爵は観客席へ戻り僧院長はデュクロの楽屋へと向かった。

部屋に残ったのはミシヨネとアドリアーナだけとなった。ミシヨネはほっとした顔で練習を続けているアドリアーナを見た。

「ようやく二人きりになれたな。ほんの一瞬だが」

彼はアドリアーナに聞こえないようにそつと独白した。

「ずつと想い続けて溜息ばかりついているが。言すべきか。いや・・・」

彼はその言葉に対し頭を振った。

「彼女は若くて美しい。だが私はこんな老いぼれだ。彼女に私は釣り合わない。だが言うべきだろうか、それとも言わないでおくべきか」

彼は思案した。

「明日言うべきか。いや、明日になると私はもつと爺さんになってしまっている」

考え続けた。アドリアーナはその間も練習を続けている。

「いや、やはり言おう。迷っていてもはじまらない。当たって砕けるだ」

彼はアドリアーナの方へ顔を向けた。

第一幕その五

「アドリアーナ」

彼はアドリアーナに声をかけた。

「はい」

彼女は練習を続けながら答えた。

「ええと……」

彼は頭の中で言葉を選んだ。

「ちよつとしたニュースなんだけれど」

「良いニュースですか、それとも悪いニュースですか？」

「そうだね、考えようだが……」

彼はためらいながらも言葉を探す。

「カルカツソンの私の叔父さん……薬屋をやっているのだがね」

「その方が？」

アドリアーナはここで顔を向けた。ミシヨネはその顔をみて一瞬ギクリ、とした。

「死んだんだ……」

「それはお気の毒に」

彼女は哀しげに答えた。

「しかし私に遺産を残してくれたんだよ、一万リラも」

「それは良いニュースですね。叔父さんはお気の毒ですが」

「うん、しかし……」

彼はここで再びためらいながらも言葉続けた。

「この一万リラをどう扱えばいいのだろう。正直扱いに困っているんだ」

「それの方が私にとっては余程不思議ですけど」

アドリアーナは首を傾げた。ミシヨネはそれを見て言葉を続けた。
「だがいい考えが浮かんだんだ」

「その考えとは？」

「おかしい事なんだが……」

アドリアーナに悟られぬよう、だが少しはにかみながら言った。

「おかしい事？」

アドリアーナはその言葉を不思議に思いながら尋ねた。ミシヨネの様子は変だとは思っていない。

「うん、結婚をしようと思うんだ」

「いいことですよ、それは」

アドリアーナはその言葉に喜んだ。素直に祝福した。

「そう思ukai？」

ミシヨネは彼女に優しく問い詰める様に尋ねた。

「ええ」

アドリアーナはそれに対して答えた。

「私も早く結婚したいのですけど」

「えっ、貴女ですか！？」

ミシヨネはその言葉に声を弾ませた。だがアドリアーナはそれには気付いていない。

「はい。その事で少し考えているんです」

アドリアーナはだんだん沈んできた。だがミシヨネは逆につきつきしている。両者共互いのことには気付いていない。

「神よ、感謝いたします」

ミシヨネはボソツと独白した。

「私も最近色々考えることが多くなってしまいました」

「それはどのようなものですか？」

ミシヨネは親切に尋ねた。何とか告白する機会を探っているのが困っている人を見捨ててはおけぬ彼の人柄もそうさせていた。

「昨夜貴女が演じられた劇は素晴らしいものでしたよ」

自然と慰めの言葉が出る。

「はい、有り難うございます」

それまでいささか躊躇していたアドリアーナだがその言葉に元氣

付けられた。

「戦争の話が広まっていますね。確実な話はありませんけれど。それが凄く気になっていたので」

「どうしてですか？」

ミシヨネはその言葉にさらに尋ねた。

「あの方が無事かどうか」

「あの方とは？」

「私のナイト・・・・・・・・・・」

「ナイト・・・・・・・・・・？」

ミシヨネはその言葉に不吉なものを感じた。

「けれど今日帰って来ました」

「今日ですか？」

「はい、今日です」

アドリアーナは話すうちに次第に明るくなってきた。ミシヨネはその逆であつた。

「それでもずっと心配だったんです。これからそうですが。けれどミシヨネさんにお話して胸の怯えが消えました。あの人は今生きているから今のあの人を愛せばいいと。そう思いました」

「そうですか・・・・・・・・・・」

ミシヨネはその言葉を聞いて肩を落とした。だがアドリアーナはそれに気付いてはいない。

「彼はサクソニア伯爵の旗手を務めているんです。そして彼はポーランド王、ザクセン選帝侯の勇敢なご子息・・・・・・・・・・」

当時ザクセン選帝侯はポーランド王も兼ねていた。そして欧州において権勢を誇っていたのである。

「彼が戦いに出た後行方が途絶えていましたの。ところが昨日あの方にお会い出来て・・・・・・・・・・」

アドリアーナの顔はそれだけ言うともう恍惚としていた。

「そうですか・・・・・・・・・・」

彼は肩を落としたまま呟いた。アドリアーナは恍惚としたままな

のでまだそれに気付いていない。

「それで今日私の舞台を見に来るんです」

「それはよかったですね」

「そう思うでしょう!？」

「はい………」

彼はそう言うした後ろを振り向いた。

「結局私の運命はこんなものさ」

彼は自嘲気味にそう呟いた。

「ミシヨネさん、私は幸福だと思いますか!？」

「はい………」

彼女は上機嫌でミシヨネに問う。彼はそれに対して力無く頷くだけである。その時奥から合図の音がした。

「合図か………」

彼は肩を落としたまま戸口の方へ向かった。そしてその向こうへ消えていく。その時頬を服の袖口で拭いたがアドリアーナはそれには気付かなかった。

アドリアーナは暫く練習を続けていた。すると役者用の戸口から一人の若者が姿を現わした。

ザクセン軍の将校の軍服を着ている。引き締まった長身の若者だ。豊かな金髪に青い瞳を持つ美男子である。彼こそザクセン選帝候の子でありアドリアーナの想い人であるマウリツィオである。

子といっても庶子である。ザクセン候には多くの庶子がおり彼もその一人であった。だが武勇に秀で父に愛されザクセン伯に任じられていた。戦場においてはその知略で知られている。

「アドリアーナ」

だがそんな彼も戦場を離れては恋をする一人の男に過ぎない。恋人の姿を認め駆け寄る。

「マウリツィオ」

彼女もそれに気付いた。そして彼を迎え入れ抱き締める。

「やっとここまで来れたよ」

彼はアドリアーナを抱き締めながら熱い声で言った。

第一幕その六

「ここへ来るつもりだったの？」

彼女はそれに対して問うた。

「うん。だが遅れてしまった、御免」

「どうして遅れたの？」

「階段で君のことを尋ねたら足止めされてしまったんだ」

彼はそう言いながら視線をほんの僅かな間だがアドリアーナから逸らした。心の中に何かやましいものでもあるのだろうか。

「軽率過ぎるわ」

彼女はそれを窺めた。彼の目の動きには気付いていない。

「そうだろうか？僕はそうは思わないが」

彼は恋人の言葉を否定した。

「僕は君とどうしても会いたかったんだ。懐かしい母の面影を残す君に」

「まあ、そのような」

アドリアーナはその言葉に頬を赤らめた。

「君の心は僕に祖国の芳しい香りと想いを思い出させ、そしてそれにかられる心を癒してくれる。戦場にあっても僕は君を忘れたことはない、君のことが心にあるから僕は勝てたんだ」

「またそのようなお世辞を……」

アドリアーナはさらに顔を赤らめる。だがマウリツィオは言葉を続ける。

「君への想いは僕を詩人にさせてしまう」

「そして戦場での活躍は？」

アドリアーナは戦場での話を聞こうとした。

「それはまた今度話すよ。ところで今日の調子はどうなんだい？」

「今日の調子はともいいわ。だって貴方とお会い出来たんですもの」

「それは……」

マウリツイオはその言葉に喜んだ。

「今日は貴方の為だけに演じるわ。今夜は貴方だけを見て、貴方の心まで全て読み取ってみたいわ。もし私を心から見たならば……」

「……貴方は感動で涙を流してしまうでしょうね」

「そうか、それじゃあ心を込めて観させてもらうよ」

彼は恍惚として言った。

「そう、私が欲しいのは貴方のその思いだけ」

彼女も恍惚とした表情で言った。

「どんなプレゼントや尊敬よりも、宝石よりも貴方のその思いだけが欲しいの。私が欲しいのは貴方の心だけなの」

「では僕もそれに応えよう。君の想いを受け取らせてもらうよ」

二人はそう言い再び抱き締め合った。そしてアドリアーナは彼に尋ねた。

「貴方の席は？」

「右から三番目のボックスだよ」

彼は答えた。

「そう、ではそこを見ているわ。そして劇の後で貴方のお屋敷へ行きましょう」

「うん、楽しみにしているよ」

彼はその言葉に頷いた。

「そしてこれは私からの贈り物」

彼女はそう言うのと胸元に飾ってあったすみれの小さな花束を取り外した。そしてそれをマウリツイオの上衣のボタン穴に取り付けた。

「これは私が貴方に預ける想いの証。劇が終わったら出口で待っていて」

「うん、そうさせてもらうよ」

彼はそのすみれの紫の花をまさぐりながら答えた。

「約束よ、必ず待っていてね」

アドリアーナはそう言うのと舞台へと向かった。マウリツイオは客

席へと向かった。控え室には誰もいなくなった。

だがすぐに誰か入って来た。左手から公爵が入って来た。何か案じているようである。

そしてそれとほぼ同時に右の奥から僧院長が入って来た。彼はいささか誇らしげである。

「僧院長」

公爵は彼の姿を認めて声をかけた。

「こちらにありますよ」

彼はそれに対して一枚の紙を手にはヒラヒラとさせて答えた。

「それはもしかして」

公爵は彼に尋ねた。

「そうです。デュクロの貞節の証です」

しかしその声には皮肉がこもっている。どうやら何かあるようだ。もう一袋でどうですか？」

僧院長は公爵に対して悪戯っぽい顔で言った。

「うゝゝむ、まあいいだろう」

公爵は顔を顰め考えながら答えた。

「それではどうぞ」

手紙は公爵に手渡された。彼は手紙の封を切って読みはじめた。

「どうです？デュクロの字ですか？」

「筆跡を変えてあるな」

公爵は手紙の中を読みながら言った。

「随分汚い字だな。これはデュクロの字じゃないぞ」

彼はそう言うのと僧院長へ手紙を返した。

「私にはちよつと読めそうにない。悪いが読んでくれないか」
「はい」

彼はそれに従い手紙を読みはじめた。そこに左の戸口から姫君が、右の戸口から女神がそれぞれ顔を出してきた。

「あら、何か面白いことやってるわね」

二人はそう言うのと顔を隠した。そして様子を見守ることにした。

「今夜十一時にいつものセーヌ川のほとりの別荘で」

「私の別荘だよ、そこは」

公爵は彼に言った。

「政治工作打ち合わせの為に……政治工作、ですか？」

僧院長はそこで顔を顰めた。

「いいよ、私にはわかるから。続けてくれ」

「はい、それでは」

公爵に促され僧院長は読み続けた。

「待っております。他言ご無用。ピリオド」

「そしてサインは？」

「親愛なるコンスタンスより、とあります」

「やれやれ、とんだコンスタンスだな」

コンスタンスとは女性の名であるが貞節という意味もある。

「これはもしかして彼女の仮名ですか？」

僧院長は嬉しそうに尋ねた。

「まあね。だが私に見つかったのが運の尽きだ」

「おやおや、デュクロもドジなことだ」

僧院長は道化て言った。

「僧院長、止めてくれ。何か不愉快になってきた」

「はい。しかし『貞節』とはまた皮肉な仮名ですな」

「うむ。私はどうやらとんだ道化役者というわけか」

公爵は顔を顰めて言った。

「そしてその手紙の届け先は何処になっているのかね？」

「この劇場内ですね。右側三番目のボックスです。……あ

れっ、これはもしかすると」

「浮気相手が誰か知っているのかい？」

公爵は彼に尋ねた。

「ええ。確かザクセン伯の筈ですよ」

「ザクセン伯？ああ彼か」

公爵も彼のことは知っているらしい。

第一幕その七

「さっき彼がああボックスに入っていくのを見ましたし」

「成程、では間違いは無いな」

「ですね」

二人は顔を見合わせた。そして目と目で相談する。

「どうする？」

まず公爵が僧院長に尋ねた。

「そうですね、どうしましょうか」

僧院長はそう言うと考えはじめた。公爵もそれに続く。

女優達はそれを戸口の裏から聞いている。何かワクワクしてきているようだ。

「別荘にそのまま行かせてはどうですか」

僧院長は公爵に提案した。

「いいな。小さな宴が行なわれている丁度その時に役者達も招く。どうか」

「それはいいですね。下手に公爵だけ行かれるよりずっと効果的ですよ」

僧院長はその提案に同意した。

「さて、これで二羽の山鳩を捕まえるでしょう」

「はい。何かヴィーナスとマーズの逢引のようすな」

ギリシア神話のエピソードの一つである。美の女神と軍神の浮気話。

「そしてヴァルカンが私というわけだな」

公爵は胸を張って言った。

「そしてパリ中がその小さな宴の中身を知ると」

「そうだ。今から楽しみだな」

公爵は笑って言った。普通ならこうしたことは暗い情念の笑みが漂うものだが不思議に彼の顔は明るい。何かうきつきとさえしてい

る。

「では今からその準備に取り掛かるとしよう」

「はい、今すぐに」

二人はそう言うのと控え室を後にした。すると奥から姫君と女神が出て来た。

二人は公爵達が出て行った方を見て笑っている。そして言った。

「あらまあ、何と滑稽なこと」

「ほんと、まさかデユクロが自分の奥方と思ってるんじゃないかしら」

二人は公爵の様子を笑いものにながら話している。

「もういいお年なのに公爵様もお元気よね」

「ええ、若い奥様もいらっしゃるし」

「何の話をしているんだい？」

「僕達にも教えてよ」

そこに大臣と庶民が入って来た。

「ええ、いいわよ。ちよつと公爵様がご自身の鼯の女優のお遊びに焼き餅焼いていらっしゃって」

「それで浮気相手と一緒にのたを踏み込んでやろうと僧院長様とご相談してたのよ」

「えっ、何それ」

「それでご鼯の女優とその火遊びのお相手は？」

二人はそれを聞いて目を輝かせて尋ねてきた。

「知りたい？」

女優達は二人に尋ねた。

「勿論」

二人は即座に返答した。

「じゃあいいわ。ちよつと耳を貸して」

「うん」

女優達はそうして二人の耳元でゴニョゴニョと説明した。説明が終わると男二人は目を見開いて驚いた。

「それ本当！？」

「嘘じゃないよね」

「嘘でこんなこと言わないわよ」

「嘘だと思うならあそこへ行ってみたら？」

女優達は二人の顔を見て笑いながら言った。

「ううむ、何か面白くなりそうだな」

「しかしこれはかなり入り組んだ話みたいだね」

庶民は口を手を当てながら言った。

「それどういうこと？」

庶民の言葉に姫君が尋ねた。

「うん、実はザクセン伯って公爵の奥方の愛人だって噂があるんだ。実際二人でよくお会いしているしね」

「あ、その話聞いたことがあるわ」

女神がその話に突っ込みを入れた。

「何でも公爵夫人がハンサムな伯爵にえらくお熱だとか」

「へえ、そうだったんだ。僕は伯爵とアドリアーナのことは知っていたけどね」

大臣がその話に頷いた。

「あ、皆隠れましょう。誰か来たわよ」

四人はサツと部屋の片隅に身を隠した。見れば公爵と僧院長が部屋に戻って来たのだ。

「別荘に行ったのじゃなかったのかしら」

女神がそれを見て首を傾げる。

「見て。もう一人誰かいるわ」

姫君が公爵と僧院長の後ろについてきている男を指差して囁いた。
「いいな、ではこれを右から三番目のボックスにいる殿方に手渡し
てくれ」

公爵はその男に対して手紙を手渡しして言った。

「あれは照明の新入りじゃないか」

「あいつまた頼まれて断れなかったな」

男優二人が苦笑しながら言った。

「わかりました」

新入りは少しオドオドしながら応えた。どうもあまり気の強い男ではないらしい。

「よし、ではこれはチップだ」

公爵はそう言うのとひとかけらのエメラルドを彼に手渡した。気前がいい。

「あ、有り難うございます」

彼はそれに頭を垂れるとすぐにその場を去った。そして観客席へ向かって行った。

「これでよし。まさか途中で思わぬ協力者が出てくれるとはな」

「公爵、買収は協力者と言わないのでは」

「おっと、そうだったかな。ハハハ」

彼はそう言うとかラカラと笑った。そして二人はその場を後にした。

「どうやら本格的に面白い事になりそうね」

「一体どうなるのかしら」

女優達は楽しそうな顔で言った。

「これは凄いことになるかもね」

「お二人にとっては可哀想なことになりそうだけれど」

男優二人も彼女達と同じく楽しそうな表情で言う。

第一幕その八

「一体どうなるでしょうね」

「それは明日になればわかるわよ」

「小さな宴の結末は」

「明日パリ中の噂話と」

四人が楽しそうに話しているとそこにミシヨネがやって来た。

「皆さん、そろそろまた出番ですよ」

「はあ~~~~い！」

四人はそれに従い舞台へ向かった。デュクロは部屋の隅の舞台の袖に控え舞台を見ている。

彼が見ているのはアドリアーナである。彼女の姿をまるで食い入るように見つめている。

「やっぱりいい、最高だ」

彼はその演技を見ながら一人呟いている。真摯な目で。

彼の言葉通り舞台で演ずるアドリアーナの姿は素晴らしかった。

それはまるでミーズのようである。

「そう、そうだ。素晴らしい。素直さが人間像を描いて忠実さが真実を表現している」

彼は頷きながら舞台を見ている。目は完全に舞台に釘付けた。

「あそこにいるのはもう一つだな。だから台詞を覚えてくれと言ったのに」

途中他の役者が目に入る。そして顔を顰める。アドリアーナの演技が終わると観客達は一斉に拍手をした。

「うん、完璧だ」

彼も観客達と一緒に拍手をしていた。

「何時見ても素晴らしい。本当にこれ程の女優は今まで見たことがない」

彼は満足した顔で頷きつつ言った。

「だが彼女の目は私には向けられてはいない」

彼はそう言つて肩を落とした。

「彼女が見ているのは他の男だ。決して私を見てはくれない。いや、そもそも最初から私の気持ちに気付いてすらいない」

彼は落胆した声で一人呟く。

「私は彼女を振り向かせる事は出来ない。ただこうやって見ているだけだ。どうする事も出来ない。ただ一つ出来る事は彼女の姿を見て心を癒すだけだ。例えばさらに心を沈ませようとも」

彼はそう言つと舞台から目を離した。

「さて、と。次の舞台の台詞の変更を書いたメモは何処かな」

彼は右側の棚の引き出しをかきまわした。

「無いな。一体何処だ」

彼は部屋中の道具の中を探し回りはじめた。そこへマウリツイオが入つて来た。

「参つたな。よりによつてこんな時に」

彼は困つた顔で呟いた。どうやら彼にとってまずい事態が起こつたらしい。

「折角のデュクロのとりなしだというのに。よりによつて今日か」
彼はそう言つと溜息をついた。

「あの引き出しかな」

ミシヨネはまだメモを探していた。マウリツイオが部屋に来たのには気付いていたが彼に構っている暇はなかった。彼の独り言も聞いてはいなかった。それどころではなかったのだ。

「彼女があなたの方に陳情する機会を設けてくれたのだ。今でないと我が祖国の未来にも暗い影を脅かしてしまう」

どうやら複雑な国際情勢も絡んでいるらしい。彼の悩みは深刻である。

「ふう、やつと見つけたぞ」

ミシヨネはメモをようやく見つけ出した。ホッと安堵の息を漏らす。

「もうあの方は大僧正にお話しているだろうな。……だとして
すれば行くしかない」

彼は決心した。そして次の難問について考えを巡らせた。

「アドリアーナだが……。とりあえずは出口で待つか。そ
して説明しよう」

そう決めると側にあつた席に座つた。部屋に庶民が入つて来た。

「あ、いいところへ」

ミシヨネは彼の姿を見て喜びの声をあげた。

「僕ですか？」

庶民のほうもそれに気付いた。自分を指差して尋ねた。

「はい、ちよつと頼み事をしたいのですが」

「今は面倒なのは出来ませんよ」

「わかつますよ。このメモを演出の方に渡して欲しいんです」

「そういうことなら」

彼はあつさりと答えてそのメモを受け取つた。そしてその場を後
にした。

「これでよし、と」

彼は一息ついて舞台の方へ目を移す。マウリツイオはふとミシヨ
ネが彼の座るテーブルの上に置いた一枚のメモ帳に気が付いた。

「ん、紙か」

彼はふとそれを手に取つた。

「何も書いてないな。よし」

丁度インクとペンもテーブルの上にあつた。実に都合がいい。

「よし、ここに書けばいいな。さて、と」

彼はアドリアーナへ向けての断りの返事を書きはじめた。その時
観客席の方から拍手が沸き起こつた。

「デユクロの出番だな」

ミシヨネは舞台を見ながら呟いた。見ればアドリアーナに優ると
も劣らぬ美しい女性が舞台にいた。

「しかし今日の役はやっぱり彼女には合っていないな」

彼は顔を顰め首を捻りながら言った。

「あまりそうやってしゃがれ声を出すのはなあ。喉に負担がかかる。やはり今度からこの役は別の役者にしてもらうか」

彼は腕を組んで呟いた。そこへ姫君が戻って来た。どうやら出番の間の小休止らしい。

「ええと、持って来てくれと言われたメモは何処かしら」

何か頼まれ事があつたらしい。

「あちらですよ」

ミシヨネがマウリツイオが座るテーブルの上を指差した。

「監督、有り難う」

彼女はそのテーブルのところに来た。マウリツイオはふと彼女に気がついた。

「あ、マドモアゼル丁度いいところに」

「？私ですか？」

彼女は彼の言葉に少しキョトンとした。

「これもお願いします」

そう言って自分が今書いたメモを彼女に手渡した。

「こちらはアドリアーナへ」

「はい」

彼女はその場の勢いで彼の頼みを引き受けた。

「早く、出番も近いですよ！」

ミシヨネがそこで彼女を急かした。彼女はそれに驚いてすぐにその場を後にした。

「これでよし」

彼はその後ろ姿を見送りながら呟いた。

「アドリアーナは僕の言葉を受け取ってくれる」

「ふう、何とかこの場は切り抜けたか」

ミシヨネは再びデュクロへ視線を移していた。彼が良く思っていないかった場面が終わり安堵している。

「あとは彼女なら問題は無いが。それでもあの場面は危なっかしく

て見てられない」

彼は首を傾げて言った。マウリツイオもそれにつられるように呟いた。

「時としてこうした危ない橋も渡らなくてはならないとはね。因果なことだ」

「さて、とそろそろ行くか」

マウリツイオは懷から懷中時計を取り出して言った。

「あの方も美しく白い首を長くしてお待ちだろうし」

彼はそう言々と部屋を後にした。

「よし、無事終わったな。いつもながら凄い拍手だ」

ミシヨネは舞台を見て会心の笑みで言った。

「あとはアドリアーナの最後の愁嘆場だな」

程無くしてアドリアーナが舞台から出て来た。そして最後の場面を演じはじめた。

第一幕その九

「うん、まさに神技だ。素晴らしい」

彼はそれを見て満足気に頷く。そして先程のそれを凌駕する程の凄まじい拍手が場内に鳴り響いた。

劇は終わった。カーテンコールを終え俳優達が控え室に戻って来る。

「皆さん、お疲れ様です」

ミシヨネは彼等を迎え言葉をかけた。

「はい」

彼等は皆疲れた顔でそれに応えた。だが疲れたとはいっても満足した顔である。

「難しい役だったけれど無事演じきれたわ」

姫君がほっとした顔で言った。

「私の艶姿、殿方を悩殺してしまったみたい」

女神は媚惑的な笑みを浮かべて言った。

「私の剣は見事な冴だっただろう」

「今度その扱い方教えてね。次は僕がやる役だし」

男優二人は仲良く話している。皆劇が終わり胸を撫で下ろしている。

「皆さん、今日の演技は素晴らしいものでしたよ。次の舞台も頑張りますよ」

ミシヨネは彼等に再び声をかけた。

「ええ。けれど次って明日よ」

「一息つく暇もないわよねえ」

女優二人が愚痴をこぼす。それを男優二人が宥める。

「まあまあその分報酬も増えるし」

「それにファンがまた増えるよ」

女優達もその言葉に宥められ愚痴を止めた。そこへどうやら準備

を終えて戻って来たらしい公爵と僧院長、そして貴族や紳士達が入って来た。

「やお疲れ様。皆実に素晴らしい演技だったよ」

まずは公爵が彼等を褒め称えた。彼は演劇通としても知られているようだ。

「本当に。ただデュクロは……ここにはいないか」

僧院長が部屋を見回して言った。

「デュクロがどうかしましたか？」

ミシヨネが彼に尋ねた。

「うん。あの役は彼女にかなりの負担を与えているのではないかと思つてね。演技はともかく喉にかかる負担が大き過ぎると思つんだが」

「僧院長もそう思われますか」

ミシヨネは彼の言葉に頷いた。

「いや、これは私の主観に過ぎないんだけどね」

僧院長はミシヨネにそう言つて断つた。

「いえ、それは私も感じていました。やはりあの役は彼女のレパトリーから外すよう提案します」

「うん、確かにそのほうがいいね。彼女にはもっと相応しい役がある劇にはあるし」

「それもアドリアーナと重ならない役で。丁度今演じている役者がミラノへ行ってしまういい時期でしょう」

公爵の言葉に僧院長も相槌を打った。この僧院長も演劇に關してかなりの目利きであるようだ。

「ところでアドリアーナは？」

公爵はハッと気付き彼女の姿を探した。

「あ、まだこちらには」

ミシヨネも探して言った。丁度そこに彼女が姿を現わした。

「おお、ミーズのご帰還だ」

公爵が微笑みながら言った。彼女は奥の扉からゆっくりと入って

来る。ミシヨネも彼女を満足気に見る。

競演した役者達や貴族達も彼女を見る。だが当の彼女の顔は晴れない。何か絶望しきったような顔である。

だが皆それには気付かない。舞台の後で疲れているのだと考えた。

「アドリアーナに敬意を！」

誰かが言った。そして皆それに従い彼女を取り囲み褒め称えた。

「有り難うございます……」

彼女は笑顔でそれに応えた。だがその顔は青い。

「さて、皆さん」

ここで公爵は一同に向き直って話しはじめた。

「私は今宵皆さんを別荘の小さな宴に招待したいのですが」

「お、いよいよか」

公爵のこの提案に僧院長とアドリアーナ以外の役者達はニンマリと笑った。

「貴女は勿論主賓としてです」

公爵はそう言ってアドリアーナの方を見た。

「如何ですか、皆さん」

彼は一同に向き直り彼等に尋ねた。

「公爵の別荘ですか？」

アドリアーナはふと気がついて彼に尋ねた。

「はい、そうですが」

彼はアドリアーナの突然の態度にいささか驚きながらも答えた。

「そうですか。それでしたら是非私も。宜しいですか？」

「ええ、勿論ですよ。主賓なのですから」

公爵は再び笑みに戻って答えた。彼はアドリアーナとマウリツィオとの間にどういうやりとりがあったかは知らなかった。

（あの方もあの別荘にいるのだから）

彼女は心の中でそう呟いた。

「では今日の夜半に。宜しいですね？」

「ええ、勿論」

一同は公爵の言葉に喜んで答えた。

「では楽しみにしておりますぞ」

「こちらこそ」

一同はウキウキした顔でその場を後にした。公爵と僧院長は含み笑いで、役者達はこれから起こるであろう事を予想してニヤニヤしながら。

アドリアーナは期待に満ちた顔でその場を後にした。そして控え室には誰もいなくなった。

第二幕その一

第二幕 別荘

ブイヨン公爵はセーヌ河の岸に別荘を持っていた。伊達男の彼に相応しく別荘とはいえ豪奢な造りになっている。

別荘の横の並木路の脇にはセーヌ河が流れている。新月の蒼白い光は並木路に連なる裸木を照らしその向かい側の別荘の大理石像もその光で浮き出させている。

その大理石像の左手には邸の奥に通じる戸がある。

邸の中にはサロンも設けられている。装飾はあつさりとしているが優雅である。奥には大きなガラス窓になっておりその先はテラスになっている。そしてそこから大理石の階段で庭に降りられるようになっていいる。

そのサロンには幾つかの扉があつた。そして中央にはテーブルが置かれその上には燭台もある。その側に肱掛椅子、その左に長椅子と丸い椅子がある。

サロンの左奥には大鏡、その横にもう一つテーブルと燭台がある。中央のテーブルに誰かが不安そうに座っている。

見れば若い貴婦人である。紅い炎のような色のドレスを着ている。そしてその首や手はサファイアで飾られている。

美しい顔立ちをしている。細長い顔に長い鼻。切れ長で二重の黒い瞳、赤がかつた茶の髪。そして身体全体から妖艶な雰囲気を醸し出している。

彼女は公爵の若い夫人である。ブイヨン公爵夫人、世間ではそう呼ばれている。

夫とは四十も歳が離れている。所謂政略結婚で夫婦となった。この時代の貴族の家では当然のことであつた。当時は結婚も仕事の一つであつたのだ。これは何時でもそうなのかもしれないが。

彼女は落ち着かない様子で椅子に腰掛けていいる。まるで誰かを待

っているかのように。

「あの方はここに来られるのかしら」

彼女はふと呟いた。

「愛しい人を待つのはいつも辛いわ。何時来られるかわからない。来られないかもしれない。そしてそれを待つ時間のどれだけ長く苦しいか。待っているだけで私の心は締め付けられ揺れ動き燃え上がる。そして凍りつく。ほんの小さな物音や揺れる影にさえ心を乱されてしまうわ」

ふと時計を見る。もう十一時を指し示している。時計が音を鳴らした。

「もうこんな時間……」

ふと席を立った。そして窓のところへ行き並木路を注意深く見つめた。

「来られるのかしら？それとも……」

ふと心の中に不安の火が点る。

「いえ、そんなことは。あ……」

ふと何かを見た。

「あの方？違うわ。河の輝きだわ。夜の灯火に照らされた。そして私が見たのはあの星」

夜空を見上げた。そこには一つ大きな星が瞬いていた。

「私を哀れと思うならあの人をここに連れて来て。お願いだから」

そう呟いた時サロンに誰か入って来た。彼女は振り向いた。そこに彼はいた。

「奥方、遅れてしまいました。申し訳ありません」

マウリツイオは申し訳なさそうに部屋に入って来た。

「本当です。私がどれだけ待ち焦がれたと思っっているのですか」

公爵夫人は彼を咎めるような顔で言った。

「全く、人を待たせるのは罪ですよ」

「申し訳ありません」

公爵夫人の言葉に対して彼は頭をうなだれた。

「けれどもいいですわ。来て下さったのですもの」
彼女はそう言うのとニコリと笑った。

「けれどどうして遅れたのですか？」

「実は後をつけられまして……………」

彼は表情を暗くして言った。

「一体誰に!？」

公爵夫人はそれを聞いて顔を引き締めた。

「見知らぬ男二人組です。私が近寄ると彼等は逃げ去りましたが」

「本当ですか!？」

「私が嘘を言うと思われませんか？」

彼は真摯な顔で彼女に言った。

「それは……………」

彼女は彼の言う事を肯定しようとする。だがその時彼の胸にあるすみれの花に気付いた。アドリアーナが送ったあのすみれの花である。

「それは芳しい贈り物が証明しておりますわ」

「それは何ですか？」

マウリツィオはその言葉にキョトンとした。

「これですわ」

彼女はそう言うってマウリツィオの胸のすみれの花を取って彼に見せた。

「あつ、それは……………」

マウリツィオはそれを見てハツとした顔になった。そして内心舌打ちした。

「それは……………」

公爵夫人は彼の顔を見て媚惑的に微笑んだ。

「これは貴女への贈り物です、マダム」

彼はそう言うってそのすみれの花を彼女に握らせた。花は彼女の手の中で柔らかく握られた。

「あら、本当ですか? 誤魔化すのがお上手なんだから」

「誤魔化しているわけではありませんよ、神に誓って」

「私にも誓って下さいますか？」

「勿論です」

「それではわかりました。有り難く受け取らせて頂きます」

彼女はそう言つとすみれの花を胸にさした。そしてマウリツィオに自分の手を差し出した。

第二幕その二

「有り難き幸せ」

彼は跪きその手に接吻した。公爵夫人はそれを見て満足気に微笑んだ。

「さ、おかけになって下さい。王妃様とは貴方の権利とお考えについて長い間お話しました」

彼女は彼をサロンの中央の席に座らせ自身もその向かいに座った。そして話をはじめた。

「王妃は貴方のお考えに賛成して下さいました。また枢機卿様も支持して下さいましょう」

彼女は彼に対し優しい口調で話した。

「そうですね。それもこれも全て貴女のおかげです」

マウリツイオはそれを聞いて多いに喜んだ。顔が急に明るくなる。「でもお氣をつけて下さい。貴方の事を快く思わない人達もいますよ」

「やはり」

彼はそれを聞いて顔を引き締めた。

「彼等は抜け目ありません。今日も国王陛下に彼等の策を提出しました」

「それは一体……」

彼はそれを聞いて考え込んだ。

「貴方の拘引です」

彼女は彼に対して答えた。

「それは嫌ですね。幾らなんでもバステューユは勘弁して欲しい」
この当時この監獄は政治犯の収容所として使用されていた。後にこの監獄への襲撃がフランス革命のプレリュードとなるのはあまりにも有名な話である。もっともその実情は監獄を取り囲んだ市民達の早合点であつたのだがそれに対して余裕をもって対処しながらも

殺された監獄長たちの方こそいい迷惑であつた。

「そしてどうなさるおつもりですか？」

「あそこに入るわけにはいきません。すぐにこの国を発ちます」

「えっ！」

公爵夫人はそれを聞いて驚いた。思わず席から飛び上がりそうになつた程だ。

「何を仰るのです？折角お会いしたというのにもうフランスを発たれるなんて」

彼女は彼を必死に引き留めようとする。

「お願いです、ここに残つて。国王陛下には私がとりなしますから」

「いえ、そういうわけにはいきません」

彼はそれを振り払おうとする。

「火の粉が迫ろうとしているならが私はそれを払い退かなければなりません。さもないと私は自分の夢を果たせないでしょう」

「しかし……」

公爵夫人は彼を哀願する目で見つめた。

「申し訳ありませんが」

彼は席を立つた。そしてサロンから出て行こうとする。

「伯爵、もう私を愛してはいないのですか！？」

「いえ、そういうわけではありません」

マウリツィオは彼女を振り返つて言った。彼も辛いようである。

「ではここに残つて下さい」

彼女はそう言つと両手を彼の首に廻した。

「そして私にもう一度あの熱い口づけを」

「すいません……」

彼はその手を静かに解いた。するとその手は力無く下に落ちた。

「私は必ず戻つて来ます。それはその時に」

「いえ、その時貴方は別の人を愛しているわ」

彼女は強い、それでいて今にも壊れそうな声で言った。

「私は貴方の心を全て知っています。貴方にとって私はもう色あせ

たものでしかないのでしょうか？だからフランスを去ろうと考えておられるのです」

（まずいな、私とアドリアーナのことに気付いているのか）

彼は公爵夫人の言葉を聞いてふと思った。その危惧は心の中で急激に膨らんでいった。

「私よりもっと美しい人を愛していらっしやるのではなくて？だから去る、と。私の前を」

「そんなことはありません。私の想いは奥方にだけ向けられています」

マウリツイオは公爵夫人の疑念を必死に打ち消そうとする。だがそれは困難である。何故ならその疑念は真実であるのだから。そう、彼女の疑念は正しかった。

「嘘です、それは嘘ですわ」

公爵夫人はそれに対し頭を振って否定する。女の勘はここでも恐ろしい程正確であつた。

「奥方、それ程私が信用出来ないというのですか？」

マウリツイオは何とか彼女の疑念を取り払おうと言葉を出した。

「貴女のお力があればこそ私の私だというのに。その私がどうして貴女を裏切るといふのですか？」

「それは……」

マウリツイオの言葉と目に公爵夫人も一瞬沈黙した。その時であつた。

不意に物音がした。この別荘の玄関からだ。

「待って下さい、今何か物音がしましたよ」

マウリツイオは玄関の方を見た。

「ええ、確かに」

物音は公爵夫人も聞いていた。彼女の顔が強張った。

「聞こえますね」

マウリツイオは窓の方へ歩いて行った。そして窓から外を見る。

「はい、車の音が」

公爵夫人も彼の後について窓の外を見る。

「どなたかこの別荘にお呼びしましたか？」

「いえ、貴方の他は誰も」

公爵夫人は頭を横に振って言った。そこには偽りはなかった。

「だれかここに入って来ますよ」

「あれは……主人ですわ」

当時のフランス貴族の間では浮気や不倫は日常茶飯事であった。

彼等はかなり乱れた生活を送っていた。

だがそれを公にされるとまずいのは今と同じである。男ならまだよいが女に対してはいささか厳しいのは何時の世も変わらないことであろうか。

「私の後をつけていたのは公爵だったのかな」

「だとしたら私は……」

公爵夫人は顔を蒼くさせた。

「私にお任せを」

二人はサロンを見回した。中は月の光で明るい。マウリツイオは至って冷静であるが公爵夫人はオロオロとしている。彼はそんな彼女を気遣いつつ手前の戸口を開けた。

「ここがいいな。さあどうぞ」

彼は公爵夫人をその中に入れた。彼女はそこに力無く入って行った。

「さて、と。後は公爵達に対して一芝居だな」

彼は扉を閉めてそう呟いた。そこへ公爵と僧院長が入って来た。

「今晚は、伯爵。よくぞいらっしやいました」

公爵は皮肉を込めて彼に言った。

「まずスピードのキングを引くとは私も運がいい」

「もうすぐハートのエースも引けますよ」

僧院長が悪戯っぽく公爵に言った。

「それは何かの洒落ですか？」

マウリツイオはあえてとぼけてみせた。これも演技である。

第二幕その三

「いえ、実はね」

公爵は意味ありげにマウリツイオを見ながら言う。

「ここへ来る途中白い服を着た綺麗な女性を見たのですが」

「それは誰ですか？」

「伯爵、残念ですが私は全てを知っているのです」

「勿論私も」

僧院長も続けて言った。

「公爵、お望みとあらば私は貴方のご指示に従いますが」

マウリツイオは彼を見て言った。一歩前へ出る。

「おや、決闘ですか？」

マウリツイオが白い手袋を握ろうとしたのを見て言った。

「もう真夜中ですよ」

僧院長がそれを制止した。どうも彼等は決闘をするつもりではないようだ。マウリツイオも手袋を納めた。

「生憎私は伯爵と剣を交えるつもりはありません」

「だったら何故ここに？」

「私達はただ笑うに來ただけです」

「私をですか？」

マウリツイオは顔を顰めて問うた。

「まあ伯爵は私の債権者ですし」

「そう、公爵は伯爵の債務者なのです」

「？それはどういう意味ですか？」

マウリツイオは二人の真意を計りかねていた。

「まあデユクロのことなのですからね」

「彼女のことで何か」

マウリツイオは公爵に尋ねた。

「実はそろそろ飽きてきていたのです。もし伯爵が彼女と交際され

たいのならどうぞ」

「公爵は身を退かれると言っておられるのです」

「つまり私の好意のあらわしなのです」

公爵は少しニヤニヤしながら言った。マウリツィオもようやく二人の話がわかってきた。

「成程、私も話がようやくわかってきました」

「でしょう？ 貴方にも悪い話ではないでしょう」

「はい」

彼は僧院長の言葉に対して頷いた。

「縁切りには上手い口実というわけです」

公爵が得意げに頷きながら言った。

「では握手を」

「恨みつこなしで」

「わかりました」

そして公爵とマウリツィオは固く手を握り合った。そして三人で笑い合った。だが三人共まだ腹に一物ありそうである。何処か空虚な笑いであった。

「おや」

笑い終わると僧院長が外の気配に気付いた。見れば誰か来たようだ。

「おお、ミーズが降臨されましたぞ」

彼は戸を開いて言った。見ればアドリアーナが来ていた。

「マドモアゼル、ようこそ。伯爵も貴女をお待ちでしたよ」

公爵がそう言って彼女を出迎える。伯爵、という言葉に彼女は目の奥で喜んだ。

「伯爵、こちらのマドモアゼルが今フランスーの女優です。アドリアーナと申し上げるだけでおわかりだと思います」

僧院長が彼女の手を取りマウリツィオに紹介する。彼の顔を見てアドリアーナは喜びで息を呑んだ。

（会えた、良かった）

マウリツイオも彼女の顔を見て思った。

（まさかこんな所で）

二人の思いは別々だが二人共息を呑んだ。

「この方ですね。ザクセン伯爵閣下。何でも若くして戦場でご活躍
だとか」

「はい、その通りです」

僧院長はアドリアーナに対して答えた。

「・・・・・・・・・・」

マウリツイオはそれに対し沈黙を守っている。

「伯爵、じつはマドモアゼルはいつも共にいてくれる友人を探して
いるそうですよ、心強い友人を」

「それは初耳ですね」

マウリツイオはアドリアーナを見ながら興味深げに言った。

「僧院長、ところで」

公爵はここで二人を見ながら僧院長をそつと呼び寄せた。

「大事な用事はお忘れなく」

「それはもう」

僧院長もそれに対し笑って答えた。

「では私は夜食の準備をしてきますね」

彼はそう言うとサロンを後にした。

「どうぞ、楽しみにしていますよ」

公爵はそう言って僧院長に片目でウィンクして答えた。

第二幕その四

「では見張りをしようか。罾にかかった獲物の」

そう言つてサロンを見回した。

「ここは何処かにいる。さて、何時まで隠れていられるかな」

そう言つて彼もサロンを後にした。二人だけが残った。

「どうしてここに？」

マウリツイオはアドリアーナに問うた。

「公爵にご招待されて」

彼女は素直に答えた。

「公爵に、ねえ」

彼はそれを聞いて頭の片隅で考えた。何か引つ掛かる。

「ところでマウリツイオ」

アドリアーナは彼に尋ねた。

「何だい？」

彼は聞き返した。

「私は王様が実は若き将校というような嘘は氣にとめないけれど、
いずれ実現する夢ならば」

「何が言いたいんだい？」

彼は再び聞き返した。

「……いえ、いいわ」

彼女は自分の勘を封印した。そして彼に向き直った。

「御免なさい、さっきの言葉は取り消すわ」

「うん」

彼も内心で彼女が自分がここに来ていて自分以外の女と会つていたのを勘付いていたのだらうと思つた。だがそれはあえて心の中で留めておいた。

「おや、また誰か来たみたいだな」

マウリツイオはサロンに誰かが入つて来たのに気付いた。見れば

それは僧院長だった。

彼は花籠を持っている。そしてサロンを花で飾り付けている。それをミシヨネが手伝っている。

「あの、僧院長」

彼は不服そうである。そして僧院長に何か言おうとした。

「諦めて下さい」

彼はミシヨネが何か言おうとする前にそれを拒絶した。

「急ぎの用事なのですが」

「申し訳ありません」

取り付く島もない。

「しかしこれは私には関係ないことです」

ミシヨネは今にも帰りたいそうな口調で言った。

「ここには誰でも入ってはこれませんが出ることは出来ないのです」

僧院長はわざと厳かな口調で言った。

「仕事の打ち合わせなのですよ、新しい役の事でデュクロと」

「デュクロ？ だったらここにいた方がいいですよ、余計に」

僧院長は笑って言った。

「？ どういう意味ですかそれは」

「じきにわかりますよ」

彼はそう言った。するとミシヨネは目を見開いた。

「彼女がここにいるんですか？」

「ですからそれはすぐにわかりますよ」

彼はそう言うと言った花を取って壁に飾りはじめた。

「デュクロがここに？」

それを聞いたアドリアーナも首を傾げた。

「本当ですか、それは」

だが僧院長はミシヨネの言葉を無視して飾り付けを続ける。そして呟くように言った。

「ヴィーナスとマルスの密かなお付き合いは面白い話だったな」
その言葉にアドリアーナはすぐに反応した。

「マルスとは誰のことですか？」

無論彼女もその話は知っている。僧院長に尋ねる。

（デュクロ？彼女も来ているのか？）

マウリツイオもそれは聞いている。だからこそ考え込む。彼女とはこれといって付き合いは無い。

（先程の公爵の言葉……。もしかして私と彼女が付き合っていると思っているのか？そしてこうしてここにアドリアーナや監督を呼んだのか。私と彼女の逢引をパリ中に晒す為に）

彼は僧院長を見た。見るからに楽しそうな顔である。

（だとすれば完全な外れだな。滑稽な話だ。しかし）

彼はサロンの扉の一つをチラリ、と見た。そこには公爵夫人がいる。

（人が違っただけで彼等の企みは成功しようとしている。もし成功したなら私と彼女は破滅だ）

彼は考え込んだ。そしてアドリアーナの耳元に近付いた。

「アドリアーナ、ちょっといいかい」

「はい」

彼女は彼の真剣な顔と声に思わず耳を寄せた。

「君に頼みたいことがあるんだ」

「それは？」

彼は話を始めた。

「実は僕は政治に関する事でここに呼ばれたんだ。僕の国の将来についてね」

「それでデュクロと？」

彼はそれに対して小さく首を振って否定した。

「彼女はここには来ていないよ。僕は彼女とは何も無い。これは信用してくれるね」

「……はい」

彼女はそれが真実だと見抜いた。だからこそ静かに頷いた。

「そのうえで君に頼みたいんだ。あの扉にある女性の方が身を潜め

ている」

そう言って公爵夫人がいる扉を指差した。

「僧院長達があの中に入らないようにして機を見て中の女性を逃がしてくれ。しかしその女性を絶対に見ずに、ね」

かなり彼にとって虫のいい話である。だがこれしかなかった。

第二幕その五

「約束してくれるね？」

「・・・・・・いいわ。約束します」

彼女は答えた。彼はそれを見て頷いた。

「頼むよ」

彼はそう言つてアドリアーナの手に接吻した。そして何かを彼女に手渡した。

「有り難う」

そして彼はその場を立つた。

「あの人は誓つてくれた。・・・・・・嘘ではないわ」

彼女は口の中で、半ば心の中で呟いた。強い口調だった。

「だとしたら私も約束を果たさなくては。あの人の為に」

そしてその扉を見た。扉は何も語らない。だがそこに何かがあるのだ。それだけはわかった。そして何かを胸元にしまい込んだ。

「ここにデュクロがいる筈ないんだけどなあ」

ミシヨネがサロンに入つて来た。そして首を傾げながら呟く。

「私もそう思いますわ」

アドリアーナも相槌を打った。

「ですよ。大体彼女が自宅に帰るのはちゃんと確認しましたし」

「だそうですよ」

アドリアーナは部屋に戻つて来た僧院長に対して言った。何処か悪戯っぽい目奥は笑っていないかった。しかしそれを彼には気付かせなかった。

「本当にそう思われますか？」

僧院長はまだそれを認めていない。確信した顔で二人に言った。

「はい」

ミシヨネは答えた。

「いい加減おわかりになられたらいかがでしょう」

アドリアーナも言った。僧院長はそんな二人に対して言った。

「まあそれももうすぐおわかりになりますよ。もうすぐでね」

「またですか？よくもまあお飽きになりませんか」

「では扉を一つ一つ調べてみますか」

彼は少しムツときたようである。テーブルの上の燭台を手に取り扉の一つを調べようとした。

「あら、それは少し大人気ないですよ」

アドリアーナは微笑んで言った。あえて彼の心に訴えるように強く言った。

「それもそうですね」

僧院長は思い止まった。やはり自分でも大人気ないと思ったのだろう。

「すぐにおわかりになることですし。ちょっと公爵のところへ行つて来ますね」

「どうぞ」

僧院長は再びサロンを後にした。彼が立ち去ったのを見るとミシヨネはアドリアーナに尋ねた。

「それにしても僧院長も公爵もやけにデュクロにこだわりますね」

「確か公爵は彼女のパトロンでしたね」

当時は王侯貴族が俳優や芸術家の後見役となったのである。そうすることが彼等のステータスの一つでありまた半ば義務でもあった。ルイ十四世は貴族は何人でもすぐに作ることが出来るが芸術家はそうはいかないと言っている。

「はい。ですが最近少し疎遠だとか。しかし上の方々の考えられることは今一つわかりませんな」

「そうですね。私もあの人達との付き合いは長いつもりですけど」

当時の欧州の階級社会は歴然としたものであった。これは今だに残照が色濃く残り教育にもそれが表われている。顕著に見られる例では貴族と平民では栄養の関係から平均身長まで大きく異なってい

た。

「ああした話は極力無視するようにしていますがね。関わりあいになるとうるくなことがあります」

宮廷では陰謀が渦巻いていた。ルイ十四世の時代にはそれがもとで『火刑法廷』という血生臭い魔女狩りめいた騒動も起こっている。この時もルイ十五世の好色がもとでそうした話は絶えなかった。

「アドリアーナも注意したほうがいいですよ。出来るだけ首を突っ込まない。さもないと命がいくらあっても足りませんから」

「はい、よく心得ておきますわ」

「そうです、そうしたほうが身の為です。では私はこれで」

ミシヨネはサロンを後にした。途中アドリアーナの方を何回も振り向く。

しかし彼女は彼の気持ちには気付いてはいない。彼はそれを哀しく思ったが口には出さずその場を後にした。

そしてサロンには誰もいなくなった。アドリアーナ以外は。彼女はそれを確かめると蝋燭の火を全て消した。

中は月の光だけが差し込んでいる。青白い光がぼうつとサロンの中を照らしている。

アドリアーナは立っている。そしてマウリツィオに言われた扉に近付いた。

「もし」

彼女は扉を叩いて呼んだ。

「お返事を。お開け下さい。マダム」

中にいるであろう女性に声をかける。マダムと言ったのはあくまで自分の直感からだ。

「御安心下さい、私は貴女の味方です、マウリツィオの名にかけてそれは誓います」

「マウリツィオの」

中にいる公爵夫人はその名に反応した。そしてそつとアドリアーナに尋ねた。

第二幕その六

「何の御用でしょうか？」

「貴女をお助けに参りました」

アドリアーナは声を押さえて言った。少し早口になっている。

「私をですか？しかしどうやって……」

疑っている。当然であろう。陰謀渦巻く宮廷の住人なのだから。

「扉をお開け下さい。ほんの少しだけでもよろしいです」

「……はい」

彼女の言う通りほんの少しだけ扉を開けた。アドリアーナはそれを確認すると胸元から小さな鍵を取り出した。そしてそれを持った手を扉の中に入れた。

「この鍵が貴女をこの別荘から出してくれます。これは先程マウリツイオから貰ったものです」

「マウリツイオから」

「はい。この鍵を使ってそちらから出れば貴女は自由です」

「自由……」

「そうです。辱めを受けないですむのです」

「有り難うございます。喜んで受け取らせてもらいます」

彼女はそう言うアドリアーナの手にあるその鍵を受け取った。

「よろしいですね、私の申し上げたことはおわかりになりましたね？」

「はい」

彼女は鍵を手にした。それはアドリアーナにもわかった。

「誰にも見つからないようにしたいのですが残念なことに私はこの家の様子をよく知らないのです。ですから自分の言葉にも自信が持てないものでして」

「それはご心配なく。私はこの家のことはよく知っています」

公爵夫人は悦ばしげにそう言った。

「この鍵はここにある秘密の扉に……」

彼女はそう言って自分のすぐ側にある壁を探った。

「この秘密の扉がありますので」

どうやらこの別荘は思つたより複雑な構造になっているらしい。

それだけ多くの心配があるということか。

「これで逃れられますわ。これも全て貴女のおかげです。有り難うございます」

そう言ってアドリアーナの手を握った。

「いえ、お気になさらず」

アドリアーナは慎ましやかに答えた。

「ところで貴女はどなたでしょううか？後程お礼に伺いたいのですが」

「それはお構いなく」

アドリアーナは素っ気無く答えた。

「いえ、それは。折角助けて頂いたし」

「私は別によろしいので」

彼女は頑なに拒絶した。それはマウリツィオとの約束だったからだ。

「けれど少しだけそのお顔を」

戸口からそっと覗き見ようとする。

「軽はずみな行動は謹んで下さい」

彼女は顔をそむけた。

「しかし……。けれどそのお声は何処かで聞いたような」
「……」

アドリアーナはそれに答えなかった。

「侯爵夫人ですか？ブルジュ侯爵夫人」

「違います」

彼女は答えた。

「それにしても何故そんなにご自身を隠されるのです？」

「早くお逃げ下さい。さもないと取り返しのつかないことになりま
すよ」

アドリアーナはそれに答えず彼女に早く逃げるよう促した。

「はい、けれどこれはどなたのお考えですか？ 私に対してこんなに行き届いた配慮をしてくれるなんて」

「それは無条件に私を信頼してくれるお方です」

「それはもしかして……」

先程アドリアーナはマウリツィオの名を出した。それが仇になった。公爵夫人も女である。すぐにそれを察した。

「その言葉は取り消して下さい。不愉快ですわ」

キツとした口調でそう言った。

「どういう意味ですかそれは、まるで私が無礼なことを申し上げたかのようなお言葉ですが」

アドリアーナもそれに気付いた。強い口調で言葉を返す。

「マウリツィオの名前を出したのはそういうことでしたのね！？」

「それがどうかしまして！？ まるで彼をご自身の兄弟のように言われる貴女のお言葉の方が不愉快ですわ」

アドリアーナはそう言つて公爵夫人の手を掴んだ。

「この手が震えている。これはどういうことですか！？」

「それは……」

彼女は言おうとする。だがアドリアーナはそれより早く言った。

「あの方を愛しているのですね！」

強い声だった。問い詰める声であった。

「それは……」

だが公爵夫人はここで開き直った。アドリアーナに負けない強い声で言い返した。彼女の手を振り解いた。

「そうです、私の心はあの人を想う不安と激情で包まれています。

彼は私だけのもの！彼の心は私の心とだけ重なり合うものです。彼と私の結び目は誰にも解けないのです」

「それよりも固く熱いもので結ばれたのが私です！」

アドリアーナは戸口の方を見て言った。

「彼は私の傷付いた心を癒してくれます。夜に私を照らしてくれる

月のようなもの」

「彼は私の心の支配者です。天国まで私を導いてくれる太陽なので
す」

二人は言い合った。まず感情を爆発させたのは公爵夫人だった。

「思い知らせてあげるわ!」

「貴女に出来るのですか!」?

アドリアーナは挑発するように言った。

「出来ますわ、私には!」

「その震える手ですか!」?

アドリアーナも感情を剥き出しにする。公爵夫人の心はさらに燃
え上がった。

「ゆ、許せない!貴女を最後の審判のその時まで憎みます!」

「私は貴女を助けてあげているのですよ!」

「その口でよくもそんな事が!」

その時だった。大勢の人間が別荘に入って来る音がした。

「来たわ!」

アドリアーナが叫んだ。公爵が従僕や俳優達を連れて来たのだ。

「主人が!」

公爵夫人は思わず叫んでしまった。

「!」

アドリアーナはここで扉の向こうにいる恋敵の正体を知った。だ
が口には出さなかった。

「早くお行きなさい!」

彼女はそう言って公爵夫人を急がせた公爵夫人は秘密の扉に入っ
た。

「有り難う、けれど覚えていなさい!」

彼女はそう言って別荘を後にした。彼女は気配が遠くへ消えてい
くを感じていた。

「ブイヨン公爵夫人……私も覚えておくわ」

彼女はそう言って扉にもたれかかった。ドツと疲れが出て来た。

そこへ公爵と彼の従僕達、僧院長と俳優達が入って来た。公爵と僧院長は獲物がいないことにながつくりした様子であり俳優や従僕達は結局何でもここに連れて来られたかよくわからなかった。かくして騒動は何も起こらず別荘の小さな宴はそのままアドリアーナ達への公爵のもてなしとなった。

アドリアーナはその中ぐったりとして椅子に座っていた。そして宴が終わるとすぐに自宅へと帰って行った。

第三幕その一

第三幕 公爵邸

伊達男として知られる公爵の本宅はやはり豪奢なことで知られている。バロック調の邸宅は劇や催しが開けるような大きな広間まで持っている。

その広間もまたバロック様式である。何処かベルサイユ宮殿の様な大きく、それでいて派手で金や銀で彩られた広間は扉やカーテンまでもが派手に装飾されている。大きな肖像画や鏡等が壁に飾られており腰掛や椅子までもが装飾でみらびやかなものとなっている。ガラス窓から日が差し込めている。もう赤くなりだしている。夕刻が近付いているようだ。

その中を従僕達が動き回っている。椅子の配置を直したり花瓶や植木を持って歩き回っている者もいる。その中を左右に跳び回りあれこれと指図をしている者がいる。見れば僧院長である。

「花瓶はそこじゃない、あっちだよ、あっち」

従僕の一人に指示を出す。

「それはもう少し左だな。カーテンは……よし、これで問題なし」

広間のあちこちを見ながら言う。細かいところまで見ている。

「公爵は私に演出を任せてくれたからな。ここは腕の見せ所だ」

彼はニコリと笑って言った。かなり楽しそうである。

そこに誰かが入って来た。見れば公爵夫人である。

「あ、これは奥様」

僧院長や従僕達が礼をする。だが彼女はそれに対し鷹揚に挨拶を返すだけである。

「あれっ、今日は何処がおかしいな」

「ああ、いつもは笑顔で挨拶を返して下さるのに」

従僕達が首を傾げて囁き合う。彼女は従僕達に対しては結構いい

主であるようだ。

「ほらほら、手を休めない」

僧院長は彼等の背中を押して仕事に向かわせる。公爵夫人はそんな彼等に目もくれず開いている椅子に座った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼女は俯いたまま何か考えている。豪華な銀と白のドレスで身を包んでいるがその豪奢さも化粧とアクセサリーで飾られた美貌もその沈んだ様子で幾分くすんで見える。

「あの女、一体何者なの・・・・・・・・」

あの別荘の逃走劇から半月が過ぎようとしている。だが彼女の頭にあるのはあの時の女のことだけであった。

「私の憎い恋敵・・・・・・・・。どうしたら正体がわかるのでしょうか」
激しい憎しみの炎に身を包む。彼女の心はその燃え盛る暗い炎に焦がされている。

「私のマウリツイオを・・・・・・・・。私の手から何故奪おうとするの」

その紅の美しい唇を噛む。血が滲みそうになる。

「彼は私だけのもの。あの人だけは渡す事は出来ない」

その後ろでは僧院長が従僕達に指示を出している。

「そう、燭台はそこがいいな。そしてその壺はここに置こう」

的確に指示を出す。彼のセンスは中々いいようだ。

だがそれは公爵夫人の耳には入らない。ただあの別荘でのことばかり考えている。

「あの女の言葉・・・・・・・・。思い返すだけでも忌々しい」

しかし思い出さずにはいられない。そして一層激しい憎悪の炎を燃やすのだった。

「私のあの人への口付けは全て盗まれていた。あの人は今ではあの女の虜・・・・・・・・。私を抱いたあの手が今はあの女を抱いている」
憎悪はさらに強いものになっていく。最早それは誰にも止められなかった。

「あの声、それが全てを雄弁に言っているわ。そしてそれが私の心をさらに憎しみに燃え上がらせる」

それは彼女自身にもよくわかっていた。だがそれを止められないのだ。最早その女を見つけ出し自分の手で決着をつけないと気が済まなかった。

「奥様、どうなされたのですか。そんなに考え込まれて」

僧院長が声をかけてきた。どうやら一段落して彼女の様子に気が着いたらしい。

「いえ、何も」

彼女はそれをあえて否定した。憎しみを他の者に見せることは彼女のプライドが許さなかった。

「それにしてもいつもお美しい」

賛辞の言葉を述べる。齒が浮くようだが当時では女性にこうした言葉を贈るのは作法のようなものであった。

「黄金色の暁よりも美しい……」

「あら、でしたらその暁が沈んだ後はどうなのですか？」

彼女は苦つぽく笑って彼に言った。幾分気が紛れたといってもやはり見知らぬあの女に対する憎悪の念が残っている。言葉の一つ一つにやはり棘がある。

第三幕その二

「夜の紫の空を照らす月よりも。貴女はあまるで月の女神のようだ」
「月の女神。それはヘレネでしたわね」

「はい。アルテミスである場合もありますが。貴女はまるでそのヘレネのようです」

「ヘレネですか。いつもながら良い例えですこと」

彼女はそう言つて席を立つた。そして鏡の前に来た。

「神々の命は永遠のもの。そして恋の歌も永久に歌われますわ。けれど」

彼女は自分の姿を見た。他の者が羨むような美貌である。

「人の命は限りあるもの。人は神ではないのですから」

彼女は憂いを込めた声でそう言つた。まるでこの世の儚さを知っているように。

「私の言葉はお気に召しませんでしたか？」

僧院長はそんな公爵夫人の様子に少し困惑した顔になった。

「いえ、そうではありませんわ。僧院長のお言葉にはいつも感謝しています。私のような者に有り難いお言葉を。ところで一つお聞きしたいのですが」

「はい」

「私のスカート、少し短くはありませんか？」

そう言つて自分のスカートを僧院長に見てもらつた。

「別に。適度な長さだと思えますよ」

僧院長はスカートを見て彼女に言つた。

「そうですか。では胴のところは？太くなくて？」

「いえ。申し分ありませんよ」

「そうですか」

公爵夫人はそう言つと再び鏡へ顔を向けた。僧院長はそんな彼女の様子を変に思った。

「あの、奥様」

「はい」

「何か御心配でも？」

彼は氣遣う顔で公爵夫人に尋ねた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

公爵夫人は最初は答えなかった。だが暫く考えて彼に口を開いた。
「ザクセン伯の新しい恋人を探して下さい」

「？は、はい」

僧院長はこの言葉の意味がよくわからなかった。彼女とマウリツ
イオのことは知らなかったのだ。

だがデュクロと彼の話を思い出した。そして公爵とデュクロのこ
とも。夫の浮気に心を悩ませているのだと思った。

（おやおや奥様も純情な。ご自分も楽しまれればいいのに）

当時の宮廷ではごくありふれた話なのだから。

だが彼はそれを口に出さずその場を去った。そしてそこに公爵が
入って来た。正装である。

「よし、準備は整っているな」

彼は広間を見て満足気に言った。

「さあ、もうすぐ皆さんが来られるぞ」

彼の言葉通り暫くして家令に案内され広間に多くの紳士淑女が入
って来た。公爵と公爵夫人は並んでそれを出迎えた。

「ようこそ、我が家へ」

公爵は満面に笑みをたたえて彼等を迎える。その横で公爵夫人は
一人一人に言葉をかける。

「いつも来て下さり有り難うございます」
淑女達にも声をかける。

「今日もお美しくて」

客達は席に着いた。僧院長も広間に戻って来た。
「ところでお客様へのおもてなしは？」

公爵夫人は僧院長に尋ねた。

「アドリアーナ・ルクブルールが来ますよ」

その名を聞いて客人達はおおつ、と声をあげる。

「劇は『パリスの審判』、そしてシャンフルールのバレエです」

「おお、それは楽しみだ」

僧院長の話を聞いて公爵は思わず声をあげた。

「お客様と奥様の為に容易しましたよ」

僧院長は右目を瞑って彼女に言った。

「あら、それはあの大女優の為でしょう」

公爵夫人は少し皮肉を込めて言った。彼も夫も彼女のファンであることを皮肉ったのだ。

「おや、これは手厳しい」

僧院長はその言葉に思わず苦笑した。程無くして家令が告げる。

「アドリアーナ・ルクブルールの来場です！」 116

その言葉に一同オオツ、と声を挙げる。するとミシヨネに付き添われ彼女が入って来た。

赤と金のドレスを着ている。美しく飾られたその姿はまるで女神のようである。

「まさにミーズだな。いや、太陽が」

僧院長はその姿を見て呟いた。

「さあ、こちらへ。その美しいお姿をもっと近くで拝見させて下さい」

公爵はそう言って彼女を近くへ招き寄せる。

「そのような……」

公爵の言葉にアドリアーナは戸惑っている。その声を聞いた公爵夫人の顔色が変わった。

「その声は」

あの別荘での声によく似ている、と思った。

「私はここへ招かれて感激致しました」

アドリアーナはそんな彼女の言葉には気付いていない。勿論彼女のことは知っている。忘れる筈もない。だがそれは心の中にしまっ

ておいているのだ。

しかしその声を公爵夫人は覚えていたのが仇となった。さらに声を聞いて公爵夫人は確信した。

「間違い無いわ、あの声ね」

アドリアーナを見る。彼女は公爵夫人からあえて視線を外している。

「そのうえこれ程まで手厚いおもてなしをして下さって……」

「アドリアーナは本心から感激していた。それが公爵夫人には余計面白くないようだ。」

「あんなに喜んで、何と憎らしい」

彼女はアドリアーナを横目で見つづ呟く。その声は公爵にもアドリアーナにも聞こえない。半ば心で呟いているからだ。

「それにしてもまさか彼女だったとは」

アドリアーナを横目で見続け考える。

「想像もしなかったわ」

「女優とは」

アドリアーナは優雅な声で語りはじめた。

第三幕その三

「けれど女優かもしれないということは忘れていたわ。充分あり得たのに」

マウリツイオの芝居好きは彼女も知っている。美男で精悍な武人である彼は女優達からも人気があるのだ。

「芸術の神ミューズの下僕であり」

アドリアーナは慎ましやかな態度で言葉を続ける。公爵夫人はその横で激しい嫉妬の炎を燃やし続ける。

「それに気付かないとは迂闊だったわ」

公爵夫人の炎はさらに激しく燃え上がる。紅い憎悪の炎が身を焦がさんばかりであった。

「その栄誉と光輝を担う者なのです」

アドリアーナの信条をそのまま言う。彼女の心はそのまま乙女のように無垢であった。

しかしそれが一層公爵夫人の心を燃え上がらせる。彼女もまたその心は一途であったからだ。

「皆は褒めそやすけれど……私は騙されないわ」

その時僧院長が公爵に言った。

「そろそろはじめますか？」

公爵はそれに対し頭を振った。

「いや、ザクセン伯をお待ちしよう」

その言葉に公爵夫人はサツと割って入った。

「お待ちになるのは無駄でしょう」

「えっ!？」

その言葉を聞いてアドリアーナの顔色がサツと変わった。公爵夫人はそれを横目で見た。

（あら、うろたえているわね。効果ありだわ）
彼女は内心ほくそ笑んだ。

「何故だい？折角のお客人だしお待ちしないのは失礼だよ」

公爵は眉を顰めて妻に言った。かつて彼を陥れ笑い者にしようとした事は今は忘れている。

（今ね）

公爵夫人はアドリアーナを見てさらに言葉を続けた。

「ご存知でしょう、あの決闘のことを」

「決闘！？」

アドリアーナはそれを聞いてさらに顔を青くさせた。

（もう真つ白ね）

彼女はそれを見てさらに心の中で笑みを深めた。

「僧院長が使用人からお聞きになったそうですよ」

「えっ、私が！？」

僧院長はそれを聞いて思わず声をあげた。公爵夫人は彼に顔を近づけそつと囁いた。

「黙っていて下さい、よろしいですか」

「は、はあ」

僧院長は何もわからず返答した。それを聞いた彼女はアドリアーナを見て言った。

「傷はかなりお深いか。重傷と聞いていますわ」

「ああ……」

アドリアーナはそれを聞いて失神した。公爵夫人は倒れた彼女を見下ろして心の中で勝ち誇った。

「アドリアーナさん、どうしました！？」

ミシヨネが驚いて彼を助け起こす。

「いえ、何でもありません。熱気と灯りに眩んだだけです」

アドリアーナはそう言つて立ち上がった。

（それにしてもまさか今の言葉は本当なのかしら）

彼女はえも言われぬ不安を心に覚えた。そして公爵夫人を見る。

（何と憎しみに燃えた瞳）

しかしそれに怯むことはなかった。彼女も心の中で激しい炎を燃

やしているのだから。そこで家令が言った。

「伯爵が来られました！」

その言葉に一同入口へ顔を向けた。アドリアーナは蒼白だった顔をたちまち紅潮させ息を弾ませた。公爵夫人はそれを見て内心齒軋りした。

「アドリアーナさん、落ち着いて。喜びをあまり表に表すのはどうかと思いますよ」

ミシヨネがそんな彼女を窘める。アドリアーナはそれに従い心を静めた。だがその目は入口を向いたままであった。

すぐにマウリツィオが入って来た。ここにいる客人達と同じく礼服で正装している。

「あれっ、ご無事ではないか」

公爵は彼の姿を見て思わず呟いた。

「伯爵」

そして自分の前に来た彼に話しかけた。

「丁度今貴方が決闘で重傷を負われたという話が出ていましたが」

「えっ、私ですか!？」

彼はその話を聞いて思わずキョトンとした。

「はい、どうやら間違いだったようですね」

「まあ決闘沙汰になったのは事実ですが。その寸前に和解したのですよ」

「そうですか。それがそういった話になったのですね」

公爵は彼なりに話を理解した。だが真相は知らない。

マウリツィオは公爵夫人のところへ来た。そしてその足下に跪き手に接吻した。

「貴女の為にこおに参りました」

「有り難うございます」

公爵夫人はその言葉に満面の笑みを浮かべた。

「あの時は無事に別荘から出られたみたいですね」

彼は小声で公爵夫人に囁いた。

「はい。運良く」

公爵夫人も小声で返した。

「それは良かった。後で来た時にはもうおられなかったのだ」

「神が私をお救い下さいましたので」

「それを聞いて安心しました」

アドリアーナは二人がヒソヒソと話すのを見て内心不快に感じた。

「一体何を話しているのかしら……」

密会や逢引の事では、と思うと心が引き裂けそうになる。

しかしこの場ではそれは抑える。そしてそつと耳をそばだてる。

第三幕その四

「ところで例の件についてですが」

「別荘でお話したあの件ですね」

二人は口元を近付けるように囁き合う。

「はい、それについてお話したいのですが」

「それはこの宴が終わってからでよろしいですか」

二人は話を続ける。アドリアーナはそれに対し耳をきかせるが聞こえる筈もない。彼女の不安と焦燥は募る。

「聴こえないわ。一体何について話しているのかしら」

「では後程」

「はい」

二人は別れた。そこへ僧院長との宴の打ち合わせを終えた公爵がやって来た。

「伯爵、この前の戦いではかなり武勲を挙げられたようですね」

「クルランドのあれですか？」

彼は言葉を返した。

「はい。そのことについてお話を窺いたいのですが」

「武勲と言いましてもそんな大したことは……」

彼は謙遜して言う。

「まあそう仰らずに」

僧院長も彼に話をしてくれるよう頼む。

「そうです。あのミタウの攻撃のお話を」

「ご存知ではないですか」

公爵の言葉に彼は苦笑して答えた。

「ですがより詳しく知りたいのです」

「焦らすとは意地が悪い」

僧院長も言う。

「そうですね。それでは」

彼は姿勢を整えて話しはじめた。

「ミタウでロシアのメンチコフ將軍は私を騙し討ちにするよう命令を受けていました。その時私の手元にいるのは僅か一個小隊、向こうは一個軍団。戦力差にして十五対一です。しかも味方からの援軍は当てには出来ない状況でした」

「そしてどうなりました？」

一同身を乗り出して尋ねる。

「私の周りは大変な状況にありました。敵の音楽隊の演奏がもう三日間聞こえて来ました。それはまるで私達に死を告げる冥府の魔王達の声のようでした。そして遂に敵の突撃ラッパの音が聞こえて来たのです。その時私は考えました。どうすべきか、どうしてそれを退けるか」

「そして！？続けて下さい！」

皆が急かす。

「はい。その時私は気付きました。敵が火を点けようとしているのを」

「それで貴方はどうしたのです！？」

「私は自分で身を潜めている屋敷の入口の広間に火薬の筒を運び込みました。そしてその導火線に火を点けました。そして敵兵を百人程吹き飛ばしました。恐れおののいた敵は退却しそこに援軍が駆けつけてくれたのです。これがあの戦いで私のお話です」

「よくぞ生き残られました。貴方の武勲をここに讃えましょう」

「有り難うございます」

彼は謹んでその賛辞を受けた。

「素晴らしいお話でした。では軍神マルスのお話の後は舞踏の女神テルプシコーレの出番ですな」

公爵は一同の前に出てそう言った。

「斬り合いの後は踊りを」

僧院長も一礼して客人達に言った。

「皆様、今宵の舞踏は『パリスの審判』ですぞ」

パリスとはギリシア神話に名高いトロイアの王子である。彼はある時一つの審判を神々より委ねられた。それは女神達のうちの女神が最も美しいか、という話である。

審判してもらうのは三柱の女神達。女性の守護神ヘラ、知と戦の女神アテナ、そして愛と美の女神アフロディーテ、すなわちヴィーナスである。

これは正直極めて難しい判定であった。しかも女神達は自分を選んでくれたならば褒美を与えようというのである。その褒美はどれも極めて魅力的であった。その為彼は悩んだ。

だが彼はヴィーナスを選んだ。何故ならこの女神が自分に最も美しい女性を与えてくれると言ったからである。

これがトロイア戦争のもとになる。ホメロスの詩に名高い十年に渡る戦いである。神々がトロイア、ギリシア双方に分かれ英雄達が血を流した。そして多くの悲劇を生み出した戦争であった。

この劇ではまず二人の従僕が幕を引いた。するとそこに小さな村と海の背景が出て来た。

そこに羊飼いの服装を着たパリスに扮する役者が現われる。彼は土手に寄り掛かった。遠くから羊飼いの笛の音や歌い声が聴こえて来る。

するとそこにキューピット達がすがたを現わした。そしてパリスに言う。

「目覚めてはいけませんよ、羊飼いの。恋は甘い破滅のもと。貴方はその虜になる運命。だからそのまま眠っていなさい」

彼等はそう歌うとその場を去った。するとそこへ商業の神ヘルメス、すなわちマーキュリーが現われた。

そしてパリスを起こす。目覚めた彼に懷から取り出した一個の黄金の林檎を与えた。

「これは……」

パリスは尋ねた。マーキュリーは彼に言った。

「君はその林檎を最も美しい人に授けるのだ」

「最も美しい人？」
彼は尋ねた。

第三幕その五

「それはすぐにわかるよ」

マーキュリーはそう言うとその場を去った。この黄金の林檎は神々のみが食べれることを許される不老不死の林檎。トロイアの戦争で活躍した英雄アキレウスの父ペレウスとその母であるニンフの娘テイスとの婚礼の時に招かれなかった争いの神エリスがそれに怒りこの林檎を婚礼に出席していた女神達の中に投げ込んだのだ。それは無論彼女達をいがみ合わせ争いを起こさせる為だ。

そこへコーラスが聞こえて来る。舞台外で歌っている。古代ギリシアの様式だ。

「気をつけなさい、フリジアの美しい羊飼ひ！果実はどれも虫食いだらけ！争いが貴方に降りかかりますよ！気をつけなさい、貴方に与えられる贈り物とそれを与えてくれる美しい女神に」

だがそれはパリスには聞こえない。これもギリシア劇の様式なのである。舞台外の話は舞台の中の人間には決して聞こえないのだ。

ここで結婚式の立会人であるヘラ、すなわちジュノーが入って来る。言わずと知れた天空の神ゼウスの妻である女性の守護神だ。派手に着飾り堂々とした姿だ。彼女はまず自分の存在をパリスに示した。

「私のことは知っていますね」

「はい」

パリスはジュノーの言葉に頷いた。

次に女戦士アマゾネス達を従えた智と戦の女神アテネ、ミネルヴァが入って来た。彼女は鎧兜で武装している。

「私のことは知っていますね」

「はい」

パリスはミネルヴァの言葉に頷いた。繰り返しもまた古典的な劇の特色の一つである。オペラでもそうだ。

最後にボツティエリノ名画『春の祭典』のように優雅と喜びを司る女神達を従えアフロディーテ、すなわちヴィーナスが入って来た。彼女は衣で身を覆っているだけである。

「私のことは知っていますね」

「はい」

パリスは三度答えた。女神達はパリスを取り囲んだ。そして彼に尋ねた。

「この中で最も美しい女神は誰ですか？」

これは神話通りの展開であつた。

「そ、それは・・・」

パリスは迷つた。彼は女神達を見ながらあれこれ考えている。

そこでヴィーナスが衣を脱ぎ捨てた。すると白い露な裸身が現われた。

「うつ・・・」

パリスはそれを見て思わず息を飲んだ。そして彼女の方へ歩み寄る。

そして黄金の林檎を彼女に与えようとする。だがその時ふと公爵夫人に目を転じた。

彼は公爵夫人の方へ歩み寄つた。そして彼女の足下に跪き林檎を差し出した。

それを見た女神達は公爵夫人に歩み寄り彼女を取り囲んだ。そしてそれぞれ彼女の美しさを褒め称えた。アマゾネスや女神達、そしてキューピット達が彼女の周りを踊りそして去って行った。後には黄金色の林檎を手にする公爵夫人がいた。

「素晴らしい、見事な劇だ」

公爵は拍手をしながら僧院長に声をかけた。

「有り難うございます」

僧院長は一礼してそれに応えた。満足気である。

こうした劇は当時よく行なわれていた。音楽家や戯作家達もよく王侯達に自分の作品を捧げた。モーツァルトもそうした作品を残し

ているしハイドン等もそうである。これをおべつかと断ずるのは実にたやすいがその中にも名作が多くあるものなのである。十九世紀になってもロッシーニはシャルル十世の即位の折に『ランスへの旅』という作品を残している。これは彼らしい楽しい名作である。

「ところで奥様」

拍手を役者達と共に浴びた僧院長は公爵夫人のところへ来た。

「あの貴婦人ですか？」

マウリツィオの恋人のことである。見れば青いドレスを着た美しい夫人がいる。さる伯爵のご令嬢だ。

「違いますわ」

公爵夫人はいささか不機嫌そうに言った。

「そうですか」

僧院長はその言葉に首を傾げて言った。

「伯爵の」

公爵夫人はそう言ってマウリツィオを右手に持つ絹の扇で指し示した。

「愛しい美しいお方は」

そう言って隣にいるアドリアーナの方へ顔を向けた。

「マドモアゼル、ご存知ありませんか？」

そう言ってあえて優雅に微笑んだ。その微笑には毒を含んでいる。

「私が!？」

アドリアーナはその思いもよらう奇襲に戸惑った。

「そうですね。話題のもう一方の主演です。宮廷ではとある女優ではないかと言われていますが」

「それってデユクロじゃなかったっけ」

微笑みつつアドリアーナに語り掛ける公爵夫人の横で僧院長はボソリ、と言った。

「そうなのですか？私の聞いたところによりますとお相手は優美な淑女とか」

そう言って微笑んだ。この微笑みには豹の牙を隠している。

「それは何処でお聞きしました？」

公爵夫人は尋ねる。

「劇場仲間から。もっぱらの噂ですわよ」

アドリアーナは返す。負けてはいない。

「夜の誰にも知られていない逢い引き」

公爵夫人は暗にアドリアーナに彼女の恋人との密会を囁く様に言う。そこには甘い毒を含んでいる。

「月の下での秘密のお話」

アドリアーナはそれに対しこの前の別荘での話を出した。爪が微かに見えた。

二人の言葉の掛け合いは客人達も見ていた。

「何か変な掛け合いですこと」

淑女達は首を傾げて話している。

「それは一体何のお遊びですか？劇か何かの台詞ですか？」

僧院長も不思議に思い二人に尋ねる。

「恋人に捧げた小さな花束」

（それはあのすみれの花の・・・・・・）

アドリアーナは心の中で言った。あの控え室でマウリツィオに与えたあのすみれの花だ。

（くっ・・・・・・）

公爵夫人はそれを出して勝ち誇っている。無論顔には出していない。その優美な仮面の下で笑っているのだ。それは女虎のような顔である。

しかし女豹も負けてはいない。仮面の下で虎をキッと見据えた。

第三幕その六

「失われた腕輪。あたふたと逃げる際に失くした」

（まさかあれを……！！）

今度は虎が叫んだ。それを言われ瞳が燃え上がる。

この遣り取りを客人達は不思議に思い見ている。

「中国の諺かしら」

「スペインの小説ではなくて？」

両方共宮廷でもよく話題になるものである。外国に関する知識が教養のステータスシンボルの一つになるのはこの時のフランスの宮廷でも同じである。

「いいえ、違いますわ」

アドリアーナはそれに対し言った。あえて優雅な、落ち着いた声で。

「フランスの実話なんですよ」

「我が国の……」

「はい、その証拠にその腕輪がここに」

彼女はそう言つて左腕に入れていた腕輪を取り外し僧院長に手渡した。彼はそれを受け取ると淑女達に手渡した。彼女達はそれを手から手に渡して見る。公爵夫人はそれを横目で見ながら必死に怒りを抑えている。

「綺麗な腕輪ですわね」

「ええとても」

淑女達は口々に言う。

「見事な細工ですね」

公爵夫人が手に取った。そしてとぼけてそう言つた。

アドリアーナはその様子を横目で見ている。そして密かに勝ち誇つた。

だが公爵夫人も退かない。虎と豹は互いにまだ隙を窺い合つてい

る。

二人の間に火花が散る。そこへ公爵とマウリツィオがやって来た。別室で何やら話していたらしい。おそらく政治の話であろう。宴や舞台の裏でこうした話をするのは何時でも同じである。

「何のお話をされているのです？」

公爵は自分の妻や淑女達が何やら話し込んでいる事に気付いた。

「腕輪の事で」

淑女の一人が答えた。

「腕輪？どのような腕輪ですか？」

「これです」

その時その腕輪を持っていた淑女が彼に手渡した。その時公爵夫人の顔が一瞬蒼くなつた。

「これは私の妻のもですね。私が贈つたものだからよく覚えていますよ」

「奥様の！？」

淑女達はそれに驚いた。

アドリアーナは公爵夫人を見た。その瞳が剣の様に輝く。

それは公爵夫人も同じである。激しい憎悪の炎が燃え盛っている。

「何か妙な話ね」

淑女達がヒソヒソと話を始めた。その目は二人を見ている。

「ええ、見てあの二人」

アドリアーナと公爵夫人を見る。

「何かあるわね、絶対に。さもないとあそこまで睨み合わないわよ」

「大変な事にならなければいいけど」

淑女達の話も構わず二人は激しい炎を燃やしている。

「何かあるのかな、あの二人には」

公爵は僧院長に尋ねた。彼は事情を知らない。知っていても自分も多くの女性と浮名を流してきているので言う事は出来ないであろうが。

「そ、それは………」

僧院長は察しがついたが口籠った。怖ろしくて言えないのだ。

マウリツイオはわかっていたが黙っていた。この場を去ろうとも思ったがそれは卑怯と思い直しこの場に留まった。そして責任者の一人として二人の激しい炎を見た。

（これは消す事が出来ないな）

彼はそれを見て思った。そしてこの炎はさらに燃え上がった。

「マダム、一つお願いがあるのですが」

公爵夫人はわざとらしくアドリアーナに微笑んで言った。

「何でしょうか、奥様」

彼女も平静を必死に取り繕いそれに答える。

「舞台の名調子をお聞きたいのですが宜しいでしょうか？」

周りが二人のことをヒソヒソと話しているのをようやく察したのだ。あえて彼女に話し掛けた。

「ええ、よろしいですわ」

アドリアーナはそれを承諾した。側にいたミシヨネがそつと囁いた。

「慎重に選んで下さいね」

彼にもこのただならぬ様子はわかっていて。アドリアーナを気遣ってそう囁いたのだ。

「はい」

彼女はその囁きに頷いた。そして公爵夫人を見た。

「何を演じて下さるのですか？」

公爵は尋ねた。

「アドリアーナの台詞はどうでしょう？」

アドリアーナとはギリシア神話のクレタの王女だ。英雄テーセウスを助けながらも彼に棄てられる悲運の女性だ。それをあえて勧めたのだ。ここではコルネイユの書いた悲劇である。これはあからさまな攻撃であった。

「・・・・・・・・・・！」

アドリアーナはその勧めに思わず絶句した。公爵夫人は彼女の紅

潮した顔を見て微笑んだ。尚予断であるがこのアリアドネは悲しみに打ちひしがれているところを酒の神ディオニュソスに慰められ彼の恋人となる。

「私はあの劇はあまり好きじゃないな。別のものがいい」

公爵はそこで口を挟んだ。アドリアーナはその言葉に胸を撫で下ろし公爵夫人は心の中で舌打ちした。

「そうだなあ、『フェドラ』がいい。あれの帰途のくだりが聞きたいな」

ラシーヌの悲劇だ。これもギリシアの話をもとにしている。ある王の後妻フェドラが自分の義理の子を愛してしまう話である。そして彼女とその義理の子を中心とした政治や宗教までもが入り組んだ複雑な悲劇である。彼の言葉に対しアドリアーナは頭を垂れた。

「それでは『フェドラ』を」

彼女は語りをはじめ準備をした。客人達は席に就いた。

「私達も座ろう」

公爵は妻に言った。マウリツィオも僧院長も席に座った。

第三幕その七

場が引き締まる。アドリアーナの口が開いた。

「天は常に正しく我々を見ている。それなのに私は何という事をしましたのだろう」

彼女は言った。それはまさしくラシーヌの悲劇からの台詞であった。

「もうすぐ帰って来る夫と息子。夫は私の淫らな恋の証を見るだろう、そして愛しいあの子の父の前で身を震わせ卑しく慄く私の胸は同時に虚しい溜息に充ちて波打つ。そして嘲りに私の目は涙に閉ざされるのだ」

こう言ったところで公爵夫人を見る。彼女はアドリアーナをしかと見据えている。その隣にはマウリツィオがいる。これはおそらく政治的な話をする為だろう。しかしアドリアーナにとってそれはどうでもよかった。憎い女の横に彼がいる事が一層彼女の炎を燃え上がらせた。

それは公爵夫人も同じである。この台詞が自分を指し示している事はよくわかつている。身体をワナワナと震わせながらアドリアーナを見据えている。

「英雄テセウスの行いを信じてくれるだろうか？ 誇り高く情けを知る彼なら私の事をあえて冒涇したりはしないだろう。そして彼なら父と夫である王を欺く私を許してくれるだろう。そして私の為に私の果てしない、心の底から湧き上がるこの恐怖を和らげてくれるのではないだろうか？」

テセウス、と言ったところでマウリツィオを見る。

「彼は沈黙を守り私は自分の忌まわしい欺瞞の行為を知っている。しかし自分が何をするべきかは知らない。私は何をどうすればいいのだろう」

公爵夫人は黙っている。心の中も黙っているが落ち着いてはいな

い。憤怒と憎悪で満たされているのだ。

「大胆で不純な心は裏切りに快感さえ覚えて。頑なに、決して恥を
知ろうとはしない」

そう言うとき公爵夫人の方を見た。そして指を少し上げた手を上から下に、ゆっくりと、あえて優雅に手を振った。そしてその手を腰の
高さで止め暫くそのままの姿勢でいた。客人達は暫し沈黙していたがやがて起立し拍手を送った。公爵や僧院長、マウリツィオも同じであつた。

公爵夫人は暫く椅子に座っていた。アドリアーナの攻撃に唇を噛み顔を真つ赤にし身体を震わせていたが気を何とか鎮め立ち上がり拍手を送った。

「素晴らしい！」

皆口々に賛辞を送った。アドリアーナはそのままの姿勢でそれを受け
る。目は公爵夫人を見たままである。

その目は笑っていた。目元が笑っていたのではない。瞳が笑っていたのである。

公爵夫人はその瞳を見ていた。彼女の瞳は怒りで猛け狂っていた。拍手は長い間続いていたがようやく終わった。アドリアーナは姿勢を戻し客人達に一礼すると席に戻った。

その横にはミシヨネがいる。彼はそつとアドリアーナに囁いた。

「大胆な事をしたね。また気が強い」

「あら、何の事ですか？」

アドリアーナはとぼけて見せた。その顔は勝利で誇らしげに輝いていた。

公爵夫人はまだ怒りで震えている。そしてようやく心の中で呟いた。

（この怒り、必ず晴らしてやるわ……………）

そう呟くと隣にいるマウリツィオを見た。

（そして彼を必ず……………）

彼に声を掛けた。

「伯爵」

怒りを必死に覆い隠して彼に言った。

「はい」

彼も公爵夫人の怒りは知っている。それをあえて知らないふりをして答えた。

「宴の後こちらに残って下さいますか。お話したい事がありました」
「わかりました」

彼はそれを承諾した。彼女の怒りを抑えなければならないのと政治的な理由からだ。やはり彼にとっては政治は常にその心を占めているものであった。

アドリアーナはもうこれ以上ここにいる気はなかった。公爵の方へ行くと頭を垂れ申し出た。

「用件がありますのでこれで」

「私も」

ミシヨネもそれに従った。公爵はそれを承諾すると彼女に腕を貸した。

アドリアーナは客人達の挨拶を受けその場を去った。広間を出る時彼女はマウリツィオの方を振り向いた。

「・・・・・・・・・・」

彼と目が合った。彼は何も言わない。だがその心はわかった。

彼女は寂しげな目をして前へ向き直った。そして広間を後にした。公爵夫人はそれを黙って見送っていた。その瞳は怒りに燃えた憎しみの眼差しであった。

第四幕その一

第四幕 アドリアーナ邸

アドリアーナの家は意外と質素である。演劇と恋の事のみを想う彼女は贅沢というものにあまり興味を持ってはいないのだ。

三月のある日のことである。アドリアーナはその質素な自宅で休んでいた。この日は舞台も無くゆつくりと束の間の休みでその身体を休めていた。

ここは客室である。数個の椅子と机が置かれている。椅子は安楽椅子や肘掛け椅子もある。そしてかざり棚には彼女が今まで貰った記念品やトロフィが飾られている。

もう夕方になっている。赤い日が窓から差し込んでいる。まだ寒いが暖炉に火は無い。

そこへミシヨネがやって来た。この家の使用人に案内され部屋に入ってきた。

「アドリアーナさんは？」

彼は尋ねた。

「奥様でしたら寝室におられますよ」

彼女は謹んで彼に答えた。

「そうか、彼女は休んでいるのか。それはいいことだ。休んでいる時位はせめて演劇の事を忘れた方がいい。さもないと疲れきり倒れてしまうからな」

彼は使用人の言葉を聞き満足気に心の中で呟いた。

「起きていれば否が応でも騒がしいこの世の中だ。女優に戻り演劇を考えなければならなくなる。しかし」

彼は寝室を見た。

「起きたら言つて欲しいな。私を待っていた、と。夢い夢だが」

力無く微笑んでそう呟いた。その時寝室の中から鈴の音が聞こえて来た。

「はい」

使用人は寢室のドアの前へ行きノックした。そして中に入り後ろ手でそのドアを閉めた。

「起きていたのか。何だか嬉しいな」

彼は使用人が入って行くのを見届けて言った。

「心臓が激しく鳴っているな。年甲斐も無く」

彼は胸を押さえて独白した。

「鎮まるんだ。今さらどうにでもなるものではないしな」

そしてチョッキのポケットから懐中時計を取り出した。

「時計みたいに大人しく動くんだ。そして何時までもその想いを秘めておくんだ、いいね」

そう言つて時計をポケットに戻した。

「しかし彼女が出て来るのが少し遅いような。着替えているのかな」
その時ふと気が付いた。

「いや、違つたな。彼女は今病気だった」

彼はそう言つと表情を暗くさせた。

「それも恋の病だ」

彼は顔を俯けた。

「心の病気はじわじわと苛む、それにもっと早く気が着いていればな」

彼の顔はさらに暗くなつていく。机の前に腰掛けた。ふとそこに紙とペンがあることに気付く。何か書きものをした。そこに使用人が戻つて来た。

「マダムが今こちらに来られます」

彼女は微笑んでそう言った。しかし何処か事務的な声である。
「教えてくれて有り難う」

ミシヨネは彼女に対し礼を言った。そして立ち上がり彼女に今書いたものを手渡した。

「済まないがこれを買つて来てくれないか。お金は渡すから」
そう言つてお金も手渡した。

「薬だよ」

「わかりました」

使用人は紙とお金を受け取るとその場を後にした。彼女はどうか字が読めるらしい。

「ふう、これで良し。彼女が字を読めるのが幸いしたな」

彼はそう言つて席に戻つた。そこへアドリアーナが入つて来た。

白い部屋着を着ている。顔色は良くない。表情も暗い。ミシヨネの言葉通りやはり何かしら心に悩みを持っているようだ。

ドアの端のところであつて立っている。動かない。それはまるで額縁の中の肖像画のようであつた。

「ミシヨネさん、よく来て下さいました」

彼女は微笑んで言つた。

「ええ。たまには顔を見せようと思ひまして」

ミシヨネは席を立ち一礼して言つた。

「あまり気分が優れないようですね。何故そのように顔を暗くさせているのです？」

その訳はよくわかつている。だがあえてそれを尋ねた。それは彼女の事が心配でならなかつたからだ。

「眠れなかつたもので」

彼女は答えた。力無い声であつた。あの公爵夫人に見せた気丈さは何処にも無い。

「まだ忘れられませんか？」

マウリツイオが政治的事情で故郷に歸つてしまつたのだ。彼女にとってそれは大きな痛手だつたのだ。

健康を害した。そして舞台も休演し今こうして床に着いていたのだ。

「はい。忘れられるものではありません」

彼女は青い顔でそう言つた。ミシヨネはその顔を見て言つた。

「それはよくありません。早くふつ切れた方がいいです」

「それはわかつているのですが……」

そうは出来ないのだ。それが人の心というものの難しさだ。

アドリアーナも忘れてしまいたかった。そうすれば楽になれるのだから。だがそれは忘れられる程想いの弱いものではなかったのだ。想いが強ければ強い程人はそれを忘れられない。そしてその想いに悩まされ苦しめられるのだ。それも又人が人である由縁なのだ。アドリアーナはそういう意味でもあまりにも人間的であつた。

「劇の事は？」

ミシヨネは話題を変えた。彼女が命を捧げるもう一つのものに。
「考えられません」

アドリアーナは頭を振って答えた。

「名声は？女優としての」

「そんなもの……。砂上の楼閣ですわ」

事実であるう。この世にあるありとあらゆるものはそうである、という人もいる。

「芸術家としての……」

ミシヨネはまだ言おうとする。どうしても彼女を振るい立たせてあげたかった。もう一度、あの女優として。

「自覚、ですか？それももう……」

彼女はそう言って力無く笑った。彼女の沈んだ心はやはり起きなかつた。

「……」

ミシヨネは沈黙した。どうしてもアドリアーナを起き上がらせない、最後の手段に出た。

「もう一度舞台に戻って下さい。貴女を愛する人達もそれを待ち望んでいますよ」

「私を愛する人ですか？そんな人達が一体何処に……」

「それは……」

ミシヨネは次の言葉を言おうとする。だが中々言えない。口ごもつてしまう。だが言つた。

「今この場に」

「貴方がですか？」

「はい」

彼はここで先程の言葉を後悔した。言うべきではなかった、と思った。

「父親の様な、その暖かい気持ちで」

無難な言葉だった。そうとしか言えなかった。だがこの言葉こそ自分が言うに相応しい言葉だと思った。

「有り難うございます。貴方はいつも私の味方をしてくれます。けれどもう私はあの時から一時も動けないのです」

「あの時？それは何時ですか？」

ミシヨネは尋ねた。

第四幕その二

「あの夜です。公爵のお屋敷で遺恨を晴らしたあの夜」

「あの時ですか。またえらい事をしたものだと思いますよ」

彼もあの時のことを思い出した。

「あの時の怒りと憎悪に震える彼女、唇を噛み締め身体を震わせる彼女が。私がフェードルに例えたあの女が」

序々に感情が昂ってきた。

「けれどあの女は私からあの人を奪った！それが許せないのです！」
彼女はそう言うのと部屋着を放り捨てた。そして安楽椅子に架けられていたシヨールで肩を包むと部屋を出て行こうとする。

「お待ち下さい、何処へ行くつもりですか？」

その突然の行動に驚いたミシヨネが彼女の前に立ちはだかった。

「あの女に思い知らせてやるのです！」

アドリアーナは激昂した表情で言った。

「駄目です」

ミシヨネは目を閉じ首を横に振って言った。

「何故ですか！？」

「それはいけません。自重して下さい」

「いえ、嫉妬と憎悪で苦しむよりはマシです」

アドリアーナはまだ言おうとする。ミシヨネはそんな彼女を安楽椅子に座らせた。最初は激昂していた彼女も次第に落ち着いてきた。シヨールを外す。その時使用人が戻って来た。

「お帰り。頼んでいたものは買って来たかい？」

「はい、こちらに」

彼女はそう言うのと薬を差し出した。

「有り難う。おつりは取っておいて」

彼はそう言うのと薬を茶碗に入れた。そしてそれを水に溶かしてアドリアーナに差し出した。

「これをどうぞ」

「それは？」

ミシヨネが差し出した茶碗にふと気付いた。

「お薬ですよ。きつと良くなりますよ」

「いえ、私は……」

「いいから。今はこれを飲んで落ち着かれるべきです」

「けれど今の私にはどんな薬も……」

「いいから。一人で悩むのはよくありません。それにこうした事は誰もが一度は経験している事です」

「というとミシヨネさんも！？」

「と言ったら驚きますか？」

彼は微笑んで言った。

「愛の女神というのは気紛れなものでしてね。どうしようもないのに」

「貴女も失恋されたのですか」

「……いえ、違います」

彼はあえて真実を覆い隠して言った。

「私の誤った想いだっただけです」

アドリアーナは気付いてはいない。ならばこれは自分の心の中にだけ留めておこうと思った。

「それでもとても悩まれたでしょう」

「はい。……けれど私は今こうしてここにいます」

「そうですか。けれど私は耐えられないかも……」

「いえ、大丈夫ですよ」

沈みきりそうな彼女をミシヨネは必死に慰める。

「何故ですか？」

「貴女はもう一度舞台に立ち芸術の神にその魅力を捧げなければならぬからです」

彼がそう言った時使用人が新たな客人達を家に入れた。

「おお」

ミシヨネはその客人達を見て思わず喜びの声をあげた。見れば彼女と競演したあの俳優達である。

まず高官と庶民が前に出た。そしてアドリアーナの前で跪きその手に接吻した。

「これはお見舞いの言葉に替えて」

「有り難うございます。けれど何故言葉を替えたのです？」

「それは貴女のお誕生日をお祝いに来たからです」

姫君と女神がそう言って微笑んだ。

「そうです」

俳優達も立ち上がって言った。

「まさかご自身のお誕生日を忘れてしまったわけではないでしょう？」

「いえ、完全に忘れていました」

アドリアーナは嬉しさと寂しさ、そして哀しさを混じえた笑顔で言った。

「それは残念。それでも召し上がって思い出して下さい」

女神はそう言うと言っていた紙袋を手渡した。

「ボンボンです。お好きですよ」

「は、はい」

アドリアーナはそれを受け取った。姫君は箱入りの包みを手渡した。

「これはレースよ」

「私はこれを」

高官は大きな金のメダルを手渡した。

「僕はこれを」

庶民は一冊の書を。ルネサンス期のイタリアの悲劇だ。

「参ったな。皆に先を越されてしまった。ここぞという時に手渡そうとしたのに」

「あれっ、ということは監督も何か持って来ていたんですか？」

ミシヨネのその言葉に俳優達とアドリアーナが尋ねた。

「ええ、勿論。これですよ」

彼はそう言つと懷から小箱を取り出した。

「それは・・・・・・・・」

「これです。アドリアーナさん、どうぞ。私からのささやかな贈り物です」

それはダイヤの大きな首飾りであつた。

「綺麗・・・・・・・・」

アドリアーナも俳優達もその首飾りに見とれた。実に美しい首飾りであつた。

第四幕その三

「王妃様のものにそっくりね」

姫君がうつとりとした眼差しで言った。

「ええ。まさか本当にそうだったたりして」

女神が言った。彼女もその首飾りに見とれている。

「まさか。そんな事したら私はこんなところにはおれませんよ」

ミシヨネは少し慌てて言った。

「そうだね。監督がそんな事するわけないし」

「そんな事をする度胸が無い」

高官と庶民が囁し立てる様に言った。

「からかわないで下さいよ」

ミシヨネはその言葉に対し困ったような顔で言った。

「けれど本当に綺麗……。ミシヨネさん、有り難うございます」

アドリアーナは首飾りを受け取り彼に深々と頭を下げた。

「いえいえ、そんなに感謝されたらかえってこっちが畏まってしまいますよ」

彼は謙遜して言った。

「けれどこんなものを一体どうやって手に入れたの？」

「そうよねえ。ちよつとやそつとじゃ買えないわよ、こんなの」

女優達が少し首を傾げて言った。

「それは簡単です。ブユン公爵に譲って頂いたのです」

「公爵に!？」

ミシヨネの言葉に一同思わず声をあげた。

「叔父の遺産を使いましてね。それで譲って頂いたというわけです」

彼は少し芝居がかった調子で言った。

「けれどあの遺産は結婚資金にされるおつもりだったのでしょ？」

「結婚は……」

「そのお話は綺麗さっぱりとなくなりました。まあ私の柄ではないですし構いませんよ」

彼はアドリアーナに対し笑って言った。だが密かに心の中では泣いていた。

「私の為にそこまでして頂いて……」

アドリアーナは彼の両手を握って言った。

「有り難う、本当に有り難うございます……」

「いえ、本当に構いませんから。私は私の気の済むようにしただけですから」

彼は彼女のその言葉だけで充分だった。それこそが彼の生きがいなのだから。

「ところでアドリアーナさん」

男優二人が彼女に話し掛けて来た。

「はい」

アドリアーナは彼等の方へ顔を向けた。

「同僚としてお話があるのですが」

「私達も」

女優達も入って来た。

「何でしょうか」

アドリアーナはそれに対して尋ねた。

「是非舞台に戻って来て下さい。皆貴女を待っていますよ」

彼等は口を揃えて言った。アドリアーナはそれに対し微笑みで返した。

「そうですね。皆さんが私を待っていて下さるのですから」

彼女は半ば自分自身に言い聞かせるように言った。

「もう一度舞台に戻り、そして皆さんに私の演技を見てもらいましょう」

彼女は言った。これは自らへの決心の言葉であった。

「ええ、是非そうすべきです。パリの皆が貴女をお待ちですよ」
ミシヨネが笑みをたたえて彼女に言った。

「はい。ところで私がいない間に何かありましたか？」

彼女はふと気付いて皆に尋ねた。

「ええ、一つ大事件がありました」

「大事件？」

庶民の言葉に対し彼女は尋ねた。

「はい、デュクロの事で」

「彼女の？」

「そうです、公爵と別れたんですよ」

高官が真剣な表情で言った。

「えっ、本当ですか？」

「はい、まあ公爵が飽きられたと言う方が適切でしょうかね」

「あの公爵も女好きですし」

「もういいお年だというのに」

女優達もその話について言う。

「それで今彼女はもうしていますか？」

「変わりありませんよ。そんなヤワな人ではありませんし」

「はい。今は新しいパトロンを見つけちゃいまして」

「それも美男のオルレアン公爵」

「こちらの方がお若いしいいかも」

「それはまた……。彼女は相変わらずみたいです」

アドリアーナはそう言って苦笑した。デュクロとはライバル同士だが同時に友人でもあるのだ。

「はい。歌ではやされているのに全く気にしていませんね」

「そこら辺は本当に凄いというか流石というか」

「歌、ですか？」

アドリアーナは女優達の言葉に反応した。

「ええ、今パリで流行っているんですけれどね」

「知りませんか？」

「生憎。どんな歌ですか？」

「お聴きになりたいの？」

「ええまあ」

姫君の言葉に答えた。

「それでは」

「さん、はい」

女神が音頭を取った。そして四人は歌いはじめた。

「昔々一人のお年寄りの公爵がおられました。もういいお年なのにケチでとても女好きでした。女の子を口説くのにもいつもお薬と魔法を使う悪い魔法使いでもありました」

「公爵の歌みたいですね」

「まあ最初の方は」

「面白くなるのはこれからです」

男優達はアドリアーナの言葉に答えた。そして歌を再開した。

第四幕その四

「嘘の恋には偽の金、魔法が欲しい遊び好きな女の子は公爵に近付きました。がスカートの下の若い恋人を見つけられてしまい魔法を手に入れられませんでしたとさ」

彼等は明るいいリズムに合わせてその歌を歌った。ちょうど歌い終えた時使用人が部屋に入って来た。

見れば銀の盆を持っている。そしてその上に暗赤色のビロードの小箱を乗せている。

「あらっ、その小箱は？」

まずアドリアーナがその小箱に気付いた。

「ちよつと失礼」

仲間達に断つて使用人の方へ向かう。

「あ、私が」

だがミシヨネが先に行った。そして小箱の前に来た。

「多分これもお祝いの贈り物ですよ」

彼はそう言つとそれを手に取った。

「どうぞ」

そしてそれをアドリアーナに手渡した。

「はい」

彼女はそれを受け取った。箱の上には名刺がある。

「ええと……」

かなり小さい字である。彼女はそれを手に取り読んだ。

「マウリツィオより……。嘘っ、あの人から!？」

アドリアーナの顔が急に明るくなった。そしてミシヨネにそつと囁いた。

「すいません、一人になりたいのですが」

「わかりました」

彼は微笑んで頷いた。

「皆さん」

ミシヨネは俳優達の方を向いて言った。

「喉は渴いていませんか？」

「ええ、とても」

酒好きな連中である。笑顔で答えた。

「それではどうぞあちらへ。ボルドーの年代ものがありますわよ」

アドリアーナはそう言うと言食堂へ繋がるドアを指し示した。

「それでは」

彼等は満面に笑みをたたえてそちらへ向かった。

「すぐに私も行きますわ。それまでごゆっくり」

彼等は使用人に招き入れられ食堂へ入って行った。全員は入るとドアが閉じられた。

「さて、と。それでは中を見ましょう。．．．．．うつ」

アドリアーナは箱を開いた瞬間急に顔を青くさせた。

「どうしました!？」

ミシヨネはその様子に驚いた。

「いえ、何か不吉なものを感しましたので」

彼女は箱の中身をまだ見てはいない。しかしそれでも何かを感じたのだ。

「馬鹿馬鹿しい。そんなものは杞憂ですよ」

ミシヨネは彼女を励ますように言った。

「それで箱の中は一体何なのですか？」

「はい。これは．．．．．花ですね」

彼女はその花を箱の中から取り出した。それを見た彼女の顔が再び蒼白になった。

「そんな．．．．．」

それはすみれの花であった。そう、あのすみれの花である。

「あの時あの人に差し上げたあの花．．．．．捨ててしまうならまだしも突き返すなんて．．．．．。そんな、酷い、酷過ぎるわ。こんな事って．．．．．」

アドリアーナはその場に崩れ落ちた。そして泣き伏してしまった。ミシヨネはそれを見て呆然としている。どうすべきかわからなかった。

「あ、あのアドリアーナさん……」

何を言っただけかわからない。だが必死に言葉を探して彼女に言う。

「これは彼がした事ではありませんよ。伯爵はこの様な事をなさる方ではありません」

それは彼もわかっていて。彼もマウリツィオとは何度も会っている。だからこそわかったのだ。

「こういった事をするのは……おそらく女性ですよ」

彼はそう思った。こうした発想を持ち出来るのは女性だと直感したのだ。それは彼が長い間舞台に携わり女性というものをよく見てきたから言えるのだ。

「けれど一体誰が。しかもこんな残酷な方法で」

普段の彼女ならそれが誰かすぐにわかっただろう。しかし今の取り乱している彼女にはそこまで考えが至らなかった。

「そんな事はどうでもいいわ……」

彼女は呻く様に言った。奥の食堂からは四人の騒ぐ声が聞こえて来る。

第四幕その五

「ただこの花は私の……」

再びそのすみれの花束を手にとった。そして撫でる。

撫でるうちに涙が溢れてきた。止まらない。止めようがなかった。
「可哀想な花、昨日野原に咲いたばかりなのに今日にはもう朽ち果てていく花。信頼出来ない恋の誓いのように」

彼女は泣きながら語った。涙がすみれを濡らす。それがすみれを一層艶やかで儚げにしている。

「これは最初の口付けだろうか。いや、最後かも知れない。けれどこの哀れな花に口付けするわ。優しく、強く。私の終わった愛の為に」

そう言つて涙で濡れた花に口付けした。すみれの香りが彼女を覆う。本来なら芳しい筈のその香りも今はもう死の、全ての終わりの香りのようであった。

「これでもう全ては終わったわ。この花の香りが全てを消してくれる。過ぎ去りし日々も何もかもこの花と共に終わるのよ。そう、もう二度と繰り返すことはないわ」

花を暖炉の中に入れた。涙で濡れた花は今炎に包まれその中に消えていった。

「さようなら、何もかも……」

アドリアーナは肘掛け椅子の前に来るとそこに崩れ落ちた。もう立てなかった。

ミシヨネは彼女の側に来た。そして優しく声をかけた。いたわる様に。

「アドリアーナさん、それは違いますよ」

言葉を出すその顔も優しくかった。まるで娘をいたわる父の様に。

「彼は……伯爵は来られますよ」

「いいえ、そんな事……。ありえない、ありえないわ」

アドリアーナは椅子に顔を埋めたまま言った。それはまるで自分の心に灯ろうとする微かな希望を打ち消そうとするかのようだった。「いえ、絶対に来られます」

彼はまた言った。優しいが毅然とした声で。

「もうすぐ来られますよ。そして全てが明らかになります」

「そんな奇跡みたいな事が……」

「アドリアーナさん、奇跡は誰が起こすと思います？」

彼はアドリアーナに尋ねた。

「この世の全てを司る神が」

「いえ、それは違います」

彼はその言葉に対して反論した。アドリアーナは見えていなかったがその顔は真摯なものになっていた。そして正面を向いていた。まるで哲学を語る若者の様に。

「奇跡は人が起こすものです。人が願うからこそ奇跡は起こるのです。神はそれを手助けされるだけです」

「人が起こすもの……」

「そうですね、奇跡も、喜劇も、悲劇も全て人が作るものです。現に貴女は舞台上それを全て作り出しておられるではありませんか」

「……」

アドリアーナはその言葉を聞いて沈黙した。ミシヨネは自分の劇を最も診てきた人である。その彼が今こうして彼女に語っているのだ。それは彼女の心を強く打った。

この時ミシヨネは喜劇と悲劇も出した。これは彼女が女優だから出したのである。しかし彼は劇を出した事を後にどう思ったであろうか。喜劇も悲劇も人が作り出すというのは事実である。そしてそれがもたらす喜び、そして悲しみもまた現実なのである。これは非常に残酷な話であるが。

「……そしてその奇跡とは？」

アドリアーナは彼に尋ねた。

「私は伯爵に手紙を書きました」

先程使用人に持たせたあれである。

「手紙を？」

「はい。いらぬお節介でしたか？」

「いえ……」

アドリアーナはその言葉に対し首を横に振った。

その時屋敷の玄関の方から馬の嘶きが聞こえてきた。

「お、来りましたよ」

彼はあえて彼女にも聞こえるように声を弾ませて言った。

「そんなことが……」

彼女は顔を起こした。その瞳はまだ涙で濡れている。

「ところが起こるのです。それが奇跡というものです」

ミシヨネはそんな彼女の顔を見て微笑んで言った。

「アドリアーナ！」

マウリツィオの声がした。

「聞こえましたね。あの声は忘れられた事はない筈ですよ」

「いえ、違うわ。これは私の幻聴なのだわ」

彼女はまだ信じられない。

「ではこれから貴女が見るものは幻覚ですか？」

ミシヨネはそんな彼女を少しおどけた調子で言った。しかしその

顔はやはり優しいままである。

足音が近付いて来る。それはアドリアーナにも聞こえている。

一歩一歩近付いて来る。そしてそれは扉の前に来た。

「あの人が来られるのね！」

「そう、やっと信じる事が出来ましたね！」

ミシヨネはそれを見て満心の笑みで言った。

「はい、もうこうしてはいられません！」

彼女は立ち上がった。そしてドアの方へ向かいそのドアを大きく

開いた。その向こうにはマウリツィオがいる。

「これでいい、これでいいんだ、これで」

ミシヨネはそう言うとその場を去った。そして一人食堂へと入っ

て行く。

マウリツイオが部屋に入って来た。息は大きく弾んでいる。

ドアの前で待っていたアドリアーナは彼を抱き締めようとする。だがハッとして立ち止まった。

「何故ここに……！！？」

アドリアーナは恨みを込めた声と眼差しでマウリツイオに言った。

「……許してくれ」

マウリツイオは罪悪感に捉われ下を向いて言った。

「……」

アドリアーナは沈黙した。だがその眼は恨みを込めたままである。

「気の迷いだった。僕が馬鹿だった」

「あちらであの方がおられてもそれが言える？」

アドリアーナはそう言って彼を見た。問いかける眼で。

「今の僕は君だけが全てだ。信じてくれ」

「それは前にもお聞きしました。もう何度も何度も」

「それは謝る、だから許してくれ」

「けれどまたあの人のところへ行ってしまうわけなのでしょう！？また今度も」

「それは無い、僕のこの軍人としての誇りに誓って」

「私は女優です、女優に軍人の誇りと言われても」

「では言い替えよう、君を愛する一人の男としての気持ちに誓って」

マウリツイオは全てをかなぐり捨てた。そのうえでアドリアーナに言った。

第四幕その六

「一人の男として……」

その言葉はアドリアーナの心を刺激した。あまりにも純粹な言葉だったから。時として装飾は眞実を覆い隠してしまうのだ。

「そう、誓って言う。今の僕は君を愛する一人の男だ」

「……」

彼の瞳を見た。曇りなく彼女を見ている。

「……信じてよろしいのでしょうか」

「お願いだ、信じてくれ」

それは懇願であつた。それを拒絶出来るアドリアーナではなかった。

「……わかりました。信じます」

彼女は静かにそう言った。

「……有り難う」

マウリツイオは彼女を抱き締めた。ようやく二人は再び心を重ね合つたのだ。

「ザクセンに来てくれないか？そして一緒に暮らそう」

「けれど貴方は王位に……」

彼の夢を知っていた。だから彼女は踏み切れなかつたのだ。

「そんなものはもうどうでもいい。僕は君だけが必要なんだ」

「いいえ、そうはいかないわ」

アドリアーナは彼の言葉に対し首を横に振つた。

「私の王冠は劇で刺繍された作り物。王座は舞台にある虚のもの。けれど貴方も王冠と玉座は違ふわ。本物なのよ」

「それが何だというんだ」

マウリツイオはアドリアーナの言葉に少し激昂して言った。

「僕にとって君は何よりも価値あるものなんだ。王冠や玉座など君と比べたら何の価値も無い。あれこそ虚のものだ」

彼はアドリアーナを見て言った。

「しかし今君はここにこうしている。それは真実だ。僕にとっては君が側にいるこのことこそ王冠であり玉座であるんだ」

「マウリツィオ……」

まだ信じられなかった。王位という永遠の夢を捨てて自分の所に来たということが。

「だから……来て欲しい。そして何時までも、永遠に二人で暮らそう」

「……ええ」

アドリアーナは彼の手を握った。マウリツィオもそれを握り返す。二人はヒシ、と抱き合った。アドリアーナは顔を紅潮させ泣いていた。

マウリツィオは彼女をソファのところに導いた。その時彼女は急に顔を蒼くさせた。

「！？どうしたんだい！？」

それはマウリツィオにもわかった。

「喜びのあまり……」

最初はそう思った。だが違った。ふとあの花の事が思い出された。「花！？」

「ええ、貴方にあげたあの花。貴方が私に突き返したあのすみれの花」

「あのすみれの花！？おかしいな。僕は君にすみれを贈った事なんてないのに」

マウリツィオは顔を顰めて言った。

「えっ！？」

アドリアーナはその言葉に驚いた。ではあの花は一体誰が。だがそれはアドリアーナにはわからなかった。彼でないとすれば。しかし今の彼女にはわからなかった。次第に苦しくなってきた。「そしてそのすみれは？」

彼は尋ねた。

彼女は暖炉を指し示した。そして言った。

「もう燃やしてしまったけれど。見てみるとあまりにも辛いので腕の動きが鈍くなりだしている。

胸元が苦しくなった。その苦痛を庇う様に両手を胸に置いた。

「大丈夫かい？」

「ええ」

彼女は答えた。口ではそう言っても次第に苦しさが増してきている。

彼を見つめた。その黒い瞳が次第に潤んでくる。

「何故そんなに僕を見ているんだい？」

「いえ………」

急に目の前が暗くなった。何も見えなくなった。

「え………今私は何処にいるの！？」

「な、何を言ってるんだい！？」

マウリツイオはその言葉に驚いた。

目の前が再び明るくなった。しかし何かが混乱している。

「私………今何を話していたのかしら」

「アドリアーナ………一体何を言ってるんだい！？」

マウリツイオはそんな彼女を落ち着かせようとする。だが彼女はそんな彼を見て言った。

「貴方は何を言っていたの？………いえ、その前に」

アドリアーナの視界が再び暗転した。

「貴方は………何処にいるの！？」

「待ってくれ、僕は今ここにいるじゃないか、君のすぐ側に！」

「いえ、いないわ」

視界が戻った。だがそこに映るのは別のものだった。

「貴方はあの機敷にいるのよ」

彼女はそう言って微笑んだ。

「機敷………。君は何を言っているんだ」

「この大変な混雑した席に。折角だからボックスに入ればいいのに。」

「……………けどいいわ」

彼女の視線は虚ろである。既に目の前には何が映っているか自分でもわかっていないのであろうか。

「側で私を見たいのなら」

「アドリアーナ、アドリアーナ！」

彼女の両肩を掴んで必死に揺さぶる。だが反応は無い。
ただ虚ろに何処かを見ているだけである。

「大変だ……………」

彼女から手を放し机の上に置かれていた鈴を鳴らした。そして使用人を呼んだ。

第四幕その七

「陛下も宮廷の方々も皆来ておられるわ。けれど私はあの人だけが見てくれればそれでいいの」

「待ってくれ、頼むから落ち着いてくれ！」

だが彼の言葉は届いていない。再び彼女に近寄りその肩を揺さぶる。しかし反応は無い。

「一体どうしたらいいんだ……」

そこへ鈴に呼び出された使用人がやって来た。彼はそれを認めるとすぐに言った。

「ご主人が大変だ。すぐにお医者様を呼んでくれ」

彼女はそれに頷きすぐに走り去った。アドリアーナはそれに気付かず虚ろな声で言った。

「あの女が！」

「僕の声が聞こえていないのか!？」

彼は絶望的な気持ちになった。だが諦めなかった。

「あの女は私からあの人を奪った……。私の愛しいマウリツイオを」

「君は今そのマウリツイオの側にいるじゃないか！」

彼はそう言っただけ彼女を抱き締めた。

「こうして君を今抱き締めている、これでもわからないというのか!？」

「いえ、違うわ！」

アドリアーナは彼の腕の中から離れて言った。

「いや、違わない！」

彼は彼女を再び抱き締めた。しかし無駄だった。

「違うわ！」

「そんな……。僕がわからないというのか……。一体どうしたというんだ……」

彼女は辺りを見回す。そして気付いた。

「ここにいたのね、私の愛しい人」

「気付いてくれたのか……！！？」

「マウリツイオ！」

「アドリアーナ！」

二人は抱き合った。そして彼女は倒れた。

「アドリアーナ……」

彼は名を呼んだ。しかし返って来る言葉は無い。

「アドリアーナ！」

同じであつた。彼はそれに顔色を失つた。生死を賭けた戦場でもなかつたことだ。

「誰か、誰か来てくれ！早く！」

彼は叫んだ。

ミシヨネがやって来た。彼の叫び声を聞いて部屋に入つて来た。

「どうしたんですか！？」

氣を失っているアドリアーナを見た。それを見た彼も顔色を失つた。

「おお、神よ！」

「来て下さい！」

「は、はい！」

彼はアドリアーナの側へ駆け寄つた。

「一体どうしたんですか！？」

「急に何か錯乱しだして……………そして氣を失つたんだ」

「氣を……………。一体何故……………」

「それがわからないんだ。顔が青くなつてそれから苦しみだして」

「顔が……………」

ミシヨネは考えを巡らせた。その時アドリアーナの息が戻つた。

「息が戻りましたよ」

ミシヨネはそれを見て喜んだ。

「ああ、そうみたいだね」

マウリツイオはそれを見て喜んだ。

「良かった………。一体どうなるかと思いましたよ」

ミシヨネはホツと胸を撫で下ろした。

「しかしこれは一体どうしたんですか？」

「それが僕も………」

マウリツイオは首を傾げて言った。

「いや、さつき花がそうとか言ってたな。すみれの花らしいけれど」

「すみれの！？」

ミシヨネはそれを聞いて顔を再び蒼白にさせた。

「うん、何か心当たりがあるのかい？僕が贈ったとか言っていたけれど」

「はい。………。そうか、わかりましたよ」

ミシヨネは小箱を取った。そしてそこにある手紙を見せた。

「この文字に心当たりはありませんか！？」

「これは女の人の字だね」

マウリツイオはその字を見ながら言った。

「これは………。確か………」

彼は丹念にその字を見る。そして思い出した。

「ブイヨン公爵夫人の字だ！」

「まさか………！」

ミシヨネはその言葉にハツとした。

「そうだ、全てはわかったぞ！彼女はすみれの花に毒を仕込ませていたんだ！」

「何と………。何と怖ろしい事を………」

ミシヨネは愕然とした。彼女の残忍さと憎悪の凄まじさに身震いした。

花が消えた暖炉を見る。憎しみを染み込ませた恐ろしい花はもうそこにはなかった。

「とすると彼女は………」

アドリアーナを見る。マウリツイオの腕の中で目を覚まそうとし

ている。

第四幕その八

「ああ、おそらく……」

マウリツイオは唇を噛んで言った。顔には苦渋の色が滲み出ようとしている。

「そんな……」

ミシヨネはその言葉に絶望した。それはマウリツイオも同じであった。

「……」

マウリツイオはただアドリアーナの顔を見ている。彼女はゆっくりと眼を開けた。

「マウリツイオ？それに監督も」

「良かった、目は見えているみたいだ」

二人はその言葉に少し胸を撫で下ろした。

「頑張ってくれ、もう少しでお医者様が来るから」

マウリツイオは彼女を励ます様に言った。

「お医者様って……。私は死ぬの？このまま」

アドリアーナはゆっくりと頭を振った。

「嫌、それは嫌……」

彼女は言った。そしてその黒い瞳から涙を流した。

「貴方と一緒にいるのだから。そして最後まで二人でいるのだから」

「そうだ、僕達はこれからもずっと一緒にいるんだ」

マウリツイオは彼女に言った。

「そう、一緒にいるのだから。……私は死にたくはないわ」

「そう、貴女はこれから伯爵とずっと一緒にいるのです」

ミシヨネは彼女を慰め、励ます様に言った。

その時激しい痙攣がアドリアーナの身体を襲った。彼女はそれに苦悶した。

「ああ……」

その声は弱々しかった。それが全てを物語っていた。

「もう駄目みたいね……」

彼女は力無く微笑んで言った。

「そんな筈はない！」

「そうです、それは思い過ごしです」

二人は必死に励みます。しかしアドリアーナの顔を見てそれが事実であることもわかっていった。

「身体から力が抜けていく……。それがわかるわ……」

立ち上がろうとすることが出来ない。マウリツイオとミシヨネはそんな彼女を懸命に支える。

「有り難う、最後まで」

アドリアーナは二人に言った。その顔にはまるで幻影の様な優しい微笑みがたたえられていた。

「けれども駄目ね。ミューズの声が聴こえてきたから」

彼女はそう言うのと右手を上へ差し伸べた。

「光が私を誘うわ。その光が私を苦しみから解き放ってくれるー」

「ー。私は愛をこの胸に抱いて天へ行くのね。今光が私を包んだわ……マウリツイオ、ミシヨネさん」

「うん」

「はい」

二人は名を呼ばれて答えた。

「また……。お会いしましょう。今度は天界で」

彼女はそう言うのと臉をゆっくりと閉じた。そして二人の腕に重みをかけ眠りについた。

そしてそのまま息をしなくなった。

「アドリアーナ！」

「アドリアーナ！」

二人は叫んだ。しかしもう返事はなかった。

二人はアドリアーナの亡骸を抱いて慟哭する。しかし彼女の死に

顔は穏やかに彼等に微笑んでいた。

アドリアーナ「ルクブルール

完

2004・2・8

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3091f/>

アドリアーナ＝ルクヴルール

2011年4月28日00時57分発行